哲學研究　第四百號



# 未開社會考

臼井二尚

## (一)

未開社會は、文明が未だ開化するに至らないと同時に、地域的にも未だ開放されるに至らざる社會であつて、高度の封鎖性を有してゐる。文明的に未開なるが故に交通の技術手段が未發達である爲に、未開人は自己の居住地を遠く離れることが出來ない。又彼等は自然の災害危險を防止する技術手段を有たないが故に、居住地から遠く離れることは危險である。斯くの如くにして未開人はその居住地内に封鎖され、外界との接觸交渉は極めて制限されてゐる。最も原始的な段階とされる蒐集或ひは低級な狩獵によつて生活するものも、任意に移動して其の居住地を變へるといふことはないのであつて、未開社會は一般に一定の土地に古居定住してゐるのである。假令未開社會が移動性を有する場合でも、一般にそれ自身の地域を有し、その範圍内を移動するのみであつて、その範圍の外に出ることはない。而して斯く一定の土地と結合してゐる未開社會は全ての社會から遠く空間的に離れて、一つの村の中にのみ生活する。此の小社會に於て子供は成長し、彼等は自己の福祉が絶對的に村の社會と結合して居るのを見出す。彼等は其處を去らうと欲しても去ることは出來ない。彼等に開かれた唯一の二者擇一はその社會に留まるか又は被追放者となるかであり、後の場合には彼は間もなく生存の爲の苦闘に於て斃れるであらう(Mcdougall, W.: The Group Mind. 一九二七年、六九頁)。例へばツングースは氏族をなして生活し、氏族の範圍外では如何なる生活も不可能である。故に幼少年時代の初期から氏族に緊密に繫縛されてゐるツングースは、獨立した存在といふ觀念を理解することが出來な

い（シンコロゴロフ、北方ツングースの社會機構、川久保・田中譯、六〇一—二頁）。ツングース族と同樣に一般に最も原始的な社會は具體的に土地に繫縛され（concretely bound to the territory）、その社會は此の土地と不可分的な一體をなしてゐる（Lowie, R. H.: Primitive Society. 一九二〇年、二一三頁）。

早期の社會は原始林に覆はれた處の一角を征服して占居するので、その狹少な地域は間もなく餘分が無くなり、集團が大きくなると、一部の者は移住することが必要であつたが、斯くて分れ出た集團と元の集團との間には、頻繁な交渉が無かつたとバジョットはする。彼によれば、この點で原始時代の移民は近代のそれと異り、移民を故鄕に結合する感情はなかつた。それは、同一集團の分れたものゝ間には何等交通の組織的手段がなく、從つて何等實際上の交通がなかつたといふ事による。從つて一度元の集團から出て行つた者は、それを永久に去ることになるのであつた（Bagehot, W.: Physics and Politics, new cheaper ed. 一四三頁）。一つの社會の分裂の結果生成した新集團とそれの元の集團との恒常的な接觸交渉が斷絕し、兩者の孤立狀態が現出して、近隣集團が客觀的には一つの文化共同態をなしながら、しかも一つの共同社會を形成し得ず、夫々を單位とする小なる社會の併立を呈示するのである。而して斯かる場合に、文字の缺如は言語の固定作用を失はしめ、各〻の社會の方言の差異が甚だしくなり、他の文化も同樣にしてその差異を增大し、此等の社會を包括する文化共同態は年と共に衰頹して行く。

未開人の土地への繫縛は彼等の信仰によつて强化される場合もある。例へばオーストラリヤの原住民は、未だ生れざるものゝ魂も遠い過去と前して又歷〻神話の英雄と連繫を有ち、更に此の英雄の通過した道路と聯關すると信じてゐる。といふのは部族の成員の魂の家（spirit homes）や諸種の生物の魂乃至生命の集合點は、通常此等の道路に沿つてゐるからである。故に部族の將來はその成員が部族の地域の中に止まる限りに於てのみ保證されてゐるのである（Elkin, A. P.: The Australian Aborigines. 一九三八年、二一三頁）。斯かる部族も移動することがあるが、それは隣接部族が死滅するか退去して空虛になつた土地に移るが如き場合に生ずる事であつて、この際、新しい神話が成

長し又は移し植ゑられて、それが新たに移動して來た部族をその土地に結びつけるまでは、その部族の眞の鄕土は以前の土地であり、彼等は新しい土地では滯留者に過ぎぬと自らを考へてゐるに過ぎない（右同書、二五、二六頁）。

未開社會の封鎖性の著しい事は、未開人の外來者に對する態度によつても窺ふことが出來る。封鎖性の大なる社會は外部の社會との接觸交渉を缺如するが故に、兩社會の間には、文化を有無相通ずることはない。從つて內外の文化的差異は存續し、却つて又增大し易い。而して一般に差異の大なるものは相互に領解し合ふことが困難である。領解し難きものには、諸〻の可能性從つて害惡のそれの存在することが否定されず、故に斯かるものは無氣味に感ぜられ、これに對しては安心し寬いでゐることが出來ないので、常に緊張警戒の必要が感ぜられる。斯くの如きものが嫌忌され憎惡されるは自然の事である。又差異が著しく領解の困難なるものとの交渉は、食い違ひや錯誤が生じ易い爲に、勞多くして效の少いのが常である。此の點よりしても斯かる差異の著しいものが不快を感ぜしめ、從つて又嫌忌憎惡の對象となり易い。未開社會に外部から入り來たる者は斯くの如き著大なる差異を有する者であるが故に、斯かる外來者が嫌忌憎惡の對象となるのは當然の事である。未開社會に於ては外來者と敵とが同一語によつて現はされる場合の少くないのも、此の理に基づくのである。未開社會に於ては、憎惡され敵視される外來者に對する行爲は無拘束的であり暴虐であるが、これに反して內部成員相互の間は極めて溫和親密であつて、內と外とに對する人間の態度が全く相反し、著しい對照をなす。これ卽ち未開社會の道德の二元性（Dualismus der Moral）である。併し乍ら未開社會には他方また外來者の敵視階遇に全く相反する事象が存在する。卽ち外來者に對する極度の款待がエスキモー・アメリカンインディアン・アイヌ更に又古代の印度人・ギリシヤ人或ひはゲルマン人等に就いて報告され記錄されてゐる。外來者に對して最上の馳走やその上女子特に妻を提供する場合さへもある。此の極端な客人款待（Gastfreundschaft, hospitality）は如何に解せられるべきであるか？　外來者との差異が或度以上に大なる場合には、此の外來者は最早人間とは感ぜられ難くなる。高度に封鎖的な社會の人間はその社會の周圍の極めて限られた地域以外を

知らず、その地域をもつて全世界と信じてゐる。彼等にとつては、人間と呼ばれ得るものは相互に殆ど等しい彼等の同類のみである。斯かる同類と異ること著しい外來者は非人間的なるものと感ぜられる。例へばバンクスアイランドの土人にあつては、世界は彼等自身の集團とトレス諸島とニューヘブライズの北部の三四の島とおそらくはチコピヤ島とから成つてゐる。彼等が捕鯨船に乘つて來た外來者を見た時に、彼等はこれを人間ではないと信じた。彼等にとつては人間は黑い筈である。黑くない外來者は何であるか？　それは亡靈であると彼等は解した。斯くの如く未開人は見馴れず差異の大なる外來者を人間と感じ得ない如く、文明人も亦異樣怪奇なる未開人を人間とは感じ難い場合も少くない。ダーウインがフォイエルランド人に接した時、彼等の言語を人間の言語とは思ひ得なかつた。又始めてハワイに布敎に行つた宣敎師は、其の地の土人を人間と猿類との中間的存在と解した。斯うした例は少くない。斯くの如く差異の著大な外來者を人間以外のものと感じ解するところから、異形族の傳說も生れてくるのである。人間外的存在從つて惡魔又は神などと解され易い外來者には、大なる禍又は福を齎す可能性が存在すると考へられ、若しも、禍を齎すならばそれを避ける爲、福を齎すならばそれを享ける爲に、その外來者に能ふ限り款待を與へると云ふ事の生ずるのは自然である。斯く考へて來れば、外來者が一方に於ては敵視酷遇され、他方に於ては極度に款待されると云ふことが、何等矛盾せず、共に外來者の著大な差異から生じて來るものである事が明かになり、何れもその差異の根底に存する未開社會の封鎖性の顯著なる事を物語るものに他ならない事が悟られる。

併し乍ら未開社會の封鎖性と雖も絶對的のものではない。元來同一集團なりし社會が二つに分れた場合、兩社會の間には少くとも分れた當初の間は種々の接觸交渉がある。又如何なる社會にも絶對的な自給自足は不可能である。特殊なるものは外界から仰がなければならず、此の事によつて外界との交渉は或度まで避けることが出來ない。更に又諸〻の未開社會の間に共同の祭禮による接觸交渉や共通の敵との戰のための連繫なども、常にみられるところである。更に又一般に未開社會は外婚制（exogamy）を有するを通則とし、外部と通婚するのが常であるが、相互に通婚

する社會の間に樣々の接觸交渉の行はれるのは當然である。以上の如き種々の事情に依つて未開社會も或度まで外部に向つて開かれてゐるのであるが、此の開放性はその度が極めて低く、文明社會に比すれば未開社會は高度に封鎖的であると云はるべきである。

## (二)

文化の發達の度の最も低い段階に於ては、氏族乃至局地集團(local group)が最も高度に社會性を備へて居る。斯かる集團が最大の政治的範圍を成して居て、幾つかの氏族を合せた高次の社會たる部族は、未だ政治的統一體の實を備へるに至らず社會たる事の度が低い。この段階に於ける氏族乃至局地集團にとつては、自己の占有する地域を得る爲に、原始林或ひは原始荒野の一角を拓くことが、文化の未發達の故に頗る困難であつて、廣大なる地域を占有するに至り難い。他方又未開人は、生産技術の未發達の故に、眞の意味の生産を行はず、自然の提供するものを蒐集し消費するのみである。斯かる經濟段階にあつては、食糧が常に不足し勝ちであるが故に、原始社會の人口は極めて僅少に制限されざるを得ない。これ卽ち未開社會には嬰兒殺し棄老乃至老人の自殺等が社會的制度として見出される所以である。

氏族成員の數は、所によつて種々雜多であるが、二三十人乃至五六十人が普通であると云はれる。氏族の人口の小なる事は、部族の成員數が餘り大ではない事によつても明かである。例へばカリフォルニヤのインディアンの部族の成員數は、百乃至五百人であつて、標準的な人口は二乃至三百人である。食料獲得の困難なエスキモーの部族には、人口百を超えぬものも少くない(Wissler, C.: An Introduction to Social Anthropology. 一九二九年、三四頁)。斯くの如く少數の社會成員が、社會の封鎖性の故に、出生から死亡まで、勞働享樂を始めとして一切の生活を共にし、頻繁なる接觸交渉を續けて行くのであつて、社會成員の生活の共同の多い事は、未開社會の一つの特色である。

例へばツングースは、人口が尠く又經濟的必要から二乃至三家族を越えない集團を成して生活せざるを得ない。斯樣に單位の人員が制限されてゐる爲、ツングースは當然自分の個人的な友人を度々變へるわけにはいかない（シンコロゴロフ、前揭書、六〇一—二頁）。斯かる所に於ては、此等少數の友人達が生活を共同にする機會が極めて多い事は明かである。又ニューギニヤの東海岸のパプア人は、共同で勞働する。彼等は更に子供を共同で育てる。各〻の村は自己の長大な建物（barlu 又は barlui）を有するが、之は未婚の男子の爲、社交的集會の爲、又共通の事柄の討議の爲のものである。斯うした建築物も又太平洋の大抵の島々・エスキモー・インディアン等に共通な特質である（Kropotkin, P.: Gegenseitige Hilfe in der Tier- und Menschenwelt, deutsche Ausgabe besorgt von G. Landauer. 一九二三年、一〇一頁）。此の種の建築物での社會成員の生活の共同の多い事も言ふを俟たない。

## (三)

氏族乃至局地集團は通例族外婚をなすが、併しそれは所屬部族內の他の氏族乃至局地集團との間になされるものであつて、部族は族內婚を原則とし、只例外的にのみ他部族との間の通婚が見出されるに過ぎない。從つて氏族の族外婚は、包括的な部族の立場よりすれば同血族間の婚姻に過ぎない。故に氏族の成員の大部分は同血族であり、恐らく血を等しくする者の素質はかなり同等であらうと言はれるのである（Wieser, F. v.: Das Gesetz der Macht. 一九一〇年、三三—三四頁）。彼等の素質の類似性は彼等の體質の類似性からも推知されるところであつて、一般に同一部族內に於ては、文明社會の家族員の類似に比せられる容貌の整一性が認められる。右の如く未開社會にあつては、行爲の主體の間に行動の類似性が存在するが、同時に又行爲の客體の間にも同一性乃至類似性が存在する。何となれば、封鎖的であり狹小である未開社會の內部に在る對象は極めて制限されてゐるが故に、成員は同一乃至類似せる對象と交涉を有つのほかはないのである。

氏族には、上述の如く廣い地域を占有しその内部を移動するものもあるが、斯かるところに於ても社會成員が一定し從つて需要も一定してゐるが故に、移動は一定の需要の對象物の在る範圍に限られ、從つて、一定の氏族が占有する地域内に存在する物は略、同一であつて、複雜性の度は高くない。斯くて未開社會にあつては行爲の主體及び客體が夫々類似するが故に、兩者の交渉に於て具體化する行爲の樣式及び内容は、自ら高度の類似性を有するのである。而して食物獲得の技術が發達せぬ未開人にあつては、食物獲得の爲の營みが各人の日常生活の大部分を占め、獨立し得ぬ子供以外の社會成員は殆ど全て自己の食物の獲得に從事する。然も彼等の食物及び之を獲得する行爲の樣式は彼等全てに共通である。斯かる所に於ては、分業はかなりの度まで年齡や性の別に基づく仕事に限られて居り、それ以外では誰も殆ど同じ仕事をする。彼等は全て獵師であるか漁夫であるか牧夫であるかである。彼等には傳來の營みを超えんとする機會は殆どない。然も彼等は一般的に云つて、手足を禁忌や全ての通常の事態に對する行動の精密な掟によつて縛られてゐる。そして此等の何れの一つを社會の如何なる者が破つても、全集團に不幸か刑罰が齎されると思はれてゐる。此の原理は、誰か個人に依る習慣破棄が社會的な不幸の生起から確信的に推定される程に至つてゐる(Medougall 前揭書、六七—六八頁)。故に未開社會では一定の行爲樣式を各成員が守り、之と異なる樣式をとる事によつて異質性を增大せしめる事は現はれない。

以上によつて知られる如く、未開社會には、高度の等質性が支配するが故に、成員の知識にも大なる差異は見られない。最も原始的な社會には博識な呪術醫師(witch doctor)や魔術師も僧侶もない。人が此の世の法則を學びそれの意味を發見するのは、成長し大人になるといふ單純な過程に依つてゐる(Werner, H.: Comparative Psychology of Mental Development, Q. B. Cgurside 譯、一九四〇年、四〇四—五頁)。又未開社會では、富の差も微少である。如何なる未開社會にも家族は存在するが、その家族の財産には大差はない。これ一つには經濟生活の極めて低級な所では、蓄積の可能な財貨が頗る乏しい事、更に又個人の財貨は彼の死と共に埋葬又は破棄されるのが一般的で

あるといふ事情による。次に又未開社會では文化發達の度の低い程社會的勢力の差異も極めて少い。常識的には未開人の酋長は絶大なる勢力を有する如く思はれてゐるが、文化の低い社會程酋長の勢力は輕微であり殆ど絶無の所も少くない。例へばメラネシヤには、本來の酋長職と呼ばれるべきものは何も無い。酋長の地位は、高い位の者によつて占められ、その酋長の位は、宗教的入信式（initiation）の繼續的段階によつて到達される（Werner 右同書、四〇五頁）。此の入信式は、年齢によつて大抵の者が通過するが故に、年齢の等しい者は社會的勢力に於ても等しく、從つて斯かる所には何等の勢力の差異も生じないのである。但し未開社會にあつても若干の集團の分化と之に基づく異質性は存在する。例へば、同一局地集團の中にトーテムを異にする幾つかのトーテム集團が在り、他方又年齢及び性の別に基づいて、年齢階級（Altersklasse）男子團體（Männerbünde）女子團體（Frauenbünde）等の特殊集團も存在する。しかのみならず、原始社會にあつても、家族によつて生活の樣式を異にする場合もないではない。ウーツカ・インディアンの家族は全て同一の時間の區切方を用ひるのではなくて、その爲に部族の儀式の日取の選定に關し屢〻爭ひが生ずる事があるが、これは諸〻の家族が或時を定めるのに一、二箇月も相違するからであるとさへ傳へられてゐる（Werner 前掲書、一八五頁）。

## （四）

未開社會の靜止性は、何人も認めるところであつて、スペンサーの如きも既に未開社會の習慣の固定性を强調し、未開人は極端に保守的であつて、變容された行爲樣式をとる能力に乏しく、確立したものを意識的無意識的に固守する事を說いて居る（Spencer, H.: The Principles of Sociology. 一九一〇年、第一卷、七一頁）。又心理學者にして特に未開人の心理を研究してゐるヴェルナー、ラディン等も次の樣に言つて居る。卽ち、未開人の世界は傳統的固定的な性格を有する。此の世界に彼の生活するのは蝸牛が其の殼の中に棲むが如くである。彼の生活は、蝸牛がその殼

によつてぴつたりと圍い込まれて其の中で生活するにも似てゐる。此の世界には如何なる種類の變革の生ずる可能性もない (prinzipiell revolutionsfrei) (Werner 前掲書、四〇五頁、Radin, P.: Primitive Man as Philosopher. 一九二七年、四二頁)。民族學者シュミット及びコッペルスも未開社會の靜止性を確認すると共に、それの原因を社會の封鎖性及び狹小性に歸して、保守的な不動性は特に人類發展の最初の段階に於ては、猶未だ地上の住民の稀薄な分布や交通手段の不完全性によつて、强く支持されて居り、此等の事情によつて、外から來るべき新しいものゝ創造に對する刺戟は著しく減殺される、と云つて居る (Schmidt, W. und Koppers, W.: Völker und Kulturen, erster Teil, Gesellschaft und Wirtschaft der Völker. 一九二四年、一七頁)。

斯かる未開社會の靜止性乃至傳統性は、例へば未開人の言語の不變性によつても覗はれる。十六七世紀にスペイン人其他の僧侶によつて書かれた未開民族の言語に就いて云へば、大抵の場合その文法や辭書は、今日でもその儘使用が可能であると云はれる。但し未開社會には文字が缺如するが故に、言語が固定し難く不斷に流動變化すると屢〻云はれるが、一つの社會が居住地を異にする幾つかの社會に分裂する場合には、外的環境の差異によつて言語の分化轉化を生じ易いけれども、同一地域に占居する未開社會の言語は、決して大なる變動性を呈示するものではない。言語のみならず爾餘のあらゆる文化に就いても同樣の事が認められる。未開人は、十六七世紀以來同一文化を保持して居るのであつて、此の事は今日も猶石器時代の儘なる未開社會の少くない事によつて明かである。

未開社會の靜止性はまた未開人の信仰乃至俗信によつて强化されるところが少くない。卽ち彼等にあつては、祖先が慣習の保護者であり、此の祖先の殘した機構を損じてはならぬと信ぜられ、社會秩序は神聖な起源を有して外から人間に對立するものとなる (Wood, M. M.: The Stranger. 一九三四年、九九頁)。この慣習の保護者として更に神や魔の存在する事も云ふを俟たない。此の事よりして此處では上述の如く一般的な行爲樣式たる慣習の大抵のものに早晩半ば超自然的な制裁が生成するといふ早期社會に特有の事が生ずるのである。從つて部族の主要な仕來りが破

られ、新しいやり方が採られたならば、それが如何に有利であらうとも、祖先や他の神の怒りを招き言語に絶する災害が想到すべからざる仕方で發現するであらうといふ觀念を全社會が有つてゐるのである（Bagehot 前揭書、一四二頁 Lévy-Bruhl, L.: La mentalité primitive. 一九二二年、四一五頁）。如何なる野蠻人も、自己の仲間の一人が彼等の部族の古くからの野蠻な慣習や仕來りから逸脫するのを見るに堪へない。頗る一般的に部族全體は、若しも誰一人でも古い事からしりごみし又は新しい事を始めるやうなことをすれば、神から罰がくると思ふであらう（Bagehot 右同書、一〇二頁）。彼等の最高の規範は、父祖が爲した事を爲し父祖が爲した事以外を爲さないといふ事である（Lévy-Bruhl 前揭書、四五六頁）。

右の如き未開社會の靜止性を示す一例として、オーストラリヤの原住民の傳統主義を一瞥すれば、彼等のトーテミズムの一半を占め從つて彼等の生活にとつて極めて重要な增殖儀禮も、それが有效なのはそれが古い仕方でなされるからである。又彼等の儀式の大切なものである入信式で、入信者に爲される大なる啓示は、昔の英雄並びに祖先の行ひを記念する儀式のそれである。同樣にして保持されねばならぬ法と慣習又部族の福祉にとつて本質的な儀式は、此の遠い過去の時代の英雄又は祖先によつて創始されたものである。若しも新しい制度が發達せしめられ又は取入れられる事が大切と考へられるならば、それは神話の中に入り込み、斯くして神聖化されて人間の行動に對する法令となるのである（Elkin 前揭書、一八六頁）。卽ち新たなものも太古からの神話の形をとつて始めて人間の行爲を規定し得る程に、此所では行爲の原理は古い傳統に存するのである。過去現在未來の別は、此等三つの時間を充たす事實の內容が相互に異なる事に基づく。然るに未開社會では、三種の時間を同一の過去のものが充してゐる。此の事よりしても未開人には過去・現在・未來の別が明確になり難いのである。又時代の別は、各時代の內容をなす現實的な文化の樣式の差異によつてのみ可能である。時代を區切る事件は、その事件の前後の文化が全體として相違するが故にこそ時代を區分する事件となり得るのであつて、然らずんばそれは一つの時代の內部の一事件たるに止まるであらう。

然るに未開社會では、原初の文化がその儘保持されて、文化の全面的變動が無いが故に、時代の區分は此處には生じ難い。過去は全て一つであつて、一つの過去が現在に直接し未來をも包んで居る。然かのみならず、未開人にあつては、後に述べるが如き理由によつて、過去のものは過ぎ去つて今は存在せぬものではなくて、過去に在つたと同樣に現在にも在るものである。過去と同じ姿を有ち過去の儘の働きを現在も爲し將來も亦爲し續けるものなのである。故に過去は卽ち現在であつて、同時に未來でもある。未開人の生活は全て傳統的な樣式及び內容によつて構成され、過去によつて支配規定されてゐる。彼等にあつては、現在も將來も過去に於てある現在であり未來である。故に神話の關はる時は、過去・現在・未來が或意味で同時存在をなしてゐる時であり、此等三者は一つの實體の三つの相であつて（Elkin 前揭書、一八七頁）、むしろ過去・現在・未來を貫く過去・永遠の過去に彼等原住民は生きて居ると言へるのである。

未開人の傳統性の强い事は彼等の著しい記憶力にも表れる。同一の物事を反復する結果、それの全體が細部まで精密に記憶されるに至ると共に、各部分は他の部分との聯關結合に於て領解記憶され、それは斯かる他の部分との聯關結合から離れてはそれとして把捉され得ざるに至る。各部分は他の部分と共に在り從つて又全體に於てある部分であるとともに、一部の變化は他の部分從つて又全體の變化とされるに至る。未開人が彼の唄を暗誦する仕方は斯樣な部分と部分・部分と全體との關係を表す悉無(all or nothing) 反應（全體が完全でなければ、一部に缺陷があるのみでも全體が無に等しいとするものの裏方）の一例を呈示する。多くの原住民は彼等の歌をそれの中の何れの點からでも始めるといふことは出來ないで、何時も本當の初めから新たに始めるか、又は全然唄へないかである。例へばパプア人は、或歌を始めるのに、それに傳統的に先だつ歌の一番終りの句を唄つてからでないと出來ない。別々の節を入れ替へにすることも出來ない。同樣にして舞踏の中の如何なる人物も拔かされてはならぬ。かういふ事をすると舞踏の全趣旨が引裂れて了ふのである（Werner 前揭書、二〇三—四頁）。

全體が明確に記憶されればされる程、僅かな間違ひも氣懸りにたる。大切な事ほど少しの間違ひもあつてはならぬが、未開社會では魔術が極めて大切であるが故に、それは一切が正しく爲されなければならない。從つて未開人にとつては、魔術的なものも出來事並びに行爲も、それ等が全體（whole）である限りに於てのみ神祕力によつて效果があり效力を有つのである。儀式に使ふものも只全體としての完全性（global totality）のみが魔術的效果を保證する。儀式の道具は傳統から離れた點を呈示するやうな如何なる仕方に於ても作られ又使用中配置されてはならないし、更にそれ等は間違ひや又は一部缺けたところのある構造を有つてゐてもならない。如何なる種類の魔術に用ひるものもそれの全體に於てのみ有效であつて、それの極めて小さな部分の改變も總體の變化を齎らす。何百といふ事例の中の一つを擧げれば、英領ギアナのインディアン部族では、儀式に用ひるものは魔術の歌や文句と同じく、使用され又は模造される時極く微少な改變も加へられてはならない。只正確な模造のみが魔力の現前を保證する事に成功し得る。最も高度に進歩した魔術的儀禮に於てさへも、魔術的全體性の法則は傳統的な魔術の順序の不可侵性及び神聖性の中に表明されて居る（Werner 右同書、三四五頁）。文字無き未開社會に於て種々の事柄が口誦によつて間違ひなく何時までも傳へられるのも、斯くの如き全體の正確なる傳承によるところが少くない。單に魔術のみならず風俗や慣習や環境や事物等の吾人の心を動かす事もない極めて輕微な改變も、彼等には革命的に作用する。これは細部の變化と共に彼等にあつては吾人に於けるよりも遙かに著しく總體の變轉が生ずるが故である。此の考へ方は必然的にあらゆる改變に反對し習慣的なるものを固執する事に導く（Werner, H.: Einführung in die Entwicklungspsychologie. 一九三三年、九九頁）。英領ギアナのインディアンは種々のものを作るに器用であるが、併し彼等は改良をせず、彼等の祖先が昔やつたと全く同じやうにやつてゐるのも、右の如き事情に基づくのである（右同書、一〇〇頁）。又白人は一層よい慣習や道具や食糧を有つてゐる事を未開人が見拔いても、彼等は早速之を用ひんとはしないのも右と同樣である。

未開社會の傳統性の強固なる理由の一つとして、更に未開社會の文化の積分乃至統合(integration)が擧げられる。一つの社會の共にある一切の文化は相互に順應適合するやう限定變容を加へられ、時と共に相互の調和合致の度を高めて行く。從つて一社會の文化要素に交替が生ずる事なく、同じ文化要素が共に存在して永きに及ぶにつれて此等傳統の要素間の調和合致は頗る發達する。斯かる場合此等諸要素は相互にその時までに到達した形態に於て高度に適合合致するが故に、何れの要素に變化が生じその形態が新たになつても、舊い形態に調和する爾餘の一切の要素の形態は此の新たな形態に對してはよく適合合致し得ないが故に、此の新たな形態を保持し乍ら生活の調和を保ち混亂破綻を避けんとすれば、新たな形態に順應適合するやう、爾餘の要素の形態を全て改變しなければならないが、此の事の容易ならざるは言ふまでもない。此の容易でない事から免れ乍ら生活の調和を圖る爲には、如何なる要素にも變化を生じせしめない事が必要である。而して未開社會は永く全ての文化要素を傳統的形態の儘に保持するが故に、此等要素の形態間の順應適合は著しく發達してゐる。從つて如何なる要素を變化せしめても、之に應ずるやう爾餘の一切を改變する事は、極度に困難である。此の極度に困難なる事を避けんが爲に、未開人が如何なる改變をも忌避して一切を傳統的形態の儘に保持する保守主義を持するは自然の事である。文明人が未開人と接觸すれば、自己の文明を未開社會に移入せんとせずにはゐない。その爲に未開社會の文化と合致せざるものが入り込み、此處に存在する文化の統合調和を破壞する。新舊兩文化が著大な差異を有するが故に、兩者を順應合致せしめる事は極めて困難であり、爲に未開人は不調和な生活を永く續けるの他はない。此の生活の不調和はやがて彼等の生活力を減退せしめ、遂には彼等の絶滅にさへ導くのである。未開社會の未開性卽ち文化の進步なき停滯性を未開人の精神能力の先天的な劣等性に歸する說、更に此等の劣等性を未開人の大腦の大きさや構造の特異性といふ生理的因素に歸する說もあるが、斯かる說に反對する有力な學者も少くない。此等の問題は現今尙十分に解決されるに至つてゐないものであるが、他方未開社會の文化的未開性が未開社會の地域的未開性と狹小性とに負ふ所甚大なるは、以上述べたところによつて明かであら

う。此の他氣候が知力の發達に不利なる事、自然の資源の乏しい事なども、未開社會の文化の未開性を支持するものなる事は明かである。

## (五)

凡そ人間は最初から又日頃馴れ親んでゐるものゝ意義や價値を檢討批判する事なく、無意識的無反省的に斯かるものを有ち用ひてゐる。此の卽自的態度が破られる爲には、彼の斯かるものの使用受容が困難又は不可能になるといふ否定の生ずる事が必要である。而して未開人にとつては、一切のものが彼等の生れる遠い以前から在つたものであり、それに依つて彼が人にまで形成されたものであるが故に、彼がそれに從ふ事に對する否定は一切が傳統的なる此の社會に於ては殆ど生じない。從つて彼がそれを反省批判し、又それに對立乃至背反すべき機緣がない故、彼は斯かる傳統的なるものを無意識的に遵守するは當然の事である。故に又此所に於ては一切の傳統的なるものゝ主體たる社會と斯かる傳統的なるものに沒入して居る個人との間の對立はない。未開社會では原規（Urnormen）とも呼ばるべき宗敎・道德・法律・慣習を未分の儘包括する規範が成員の意志活動の準則となつて居り、成員は之を卽自的に遵守してゐる。此の原規はそれが傳統的なる點よりして總括的に慣習とも呼ばれ得るであらうが、原規としての慣習は根本に於ては未だ明確には規範的な性格を帶びるに至らない。規範意識とは、個人の意欲と一定行爲樣式とが合致せず、前者を抑制して後者に從ふべきであるといふ意識が生ずる事によつて、前者が後者によつて否定される事を媒介として兩者の對立の意識が成立する所に現れるものである。此の否定對立の意識の無いのが全き卽自態（An-Sich-Sein）である。未開社會では個人の意欲と社會の傳統的なる樣式との間に對立は無いが故に、社會成員の行動には自覺的な規範意識は伴はぬ。此の意味に於て未開社會の原規には事實的なるものゝ規範力（normative Kraft des Faktischen）（Jellinek, G.: Allgemeine Staatslehre. 第三版、一九二二年、三〇七頁）なる言葉が當て嵌まるのである。又同

様にして原始時代の人間は慣習の奴隷であるといふ言葉も妥當する。然も原規の規則は生活の全領域のあらゆる細部に及ぶ。これ慣習は萬物の王或ひは慣習は人生の主宰更なりと稱せられる所以である(穗積陳重、慣習と法律、三九、五七頁)。

オーストラリヤの原住民にとつては、事物が現に在るが如くにあるのは、過去に於ける英雄的な存在者が自から爲せる行爲の故である。慣習が遵守されるのは、たゞそれが慣習であつたからであり、或ひは此等の英雄によつて定令されたからである(Elkin 前揭書、一八六頁)とされるのも、彼等は自己の爲すところの意義や價値を何等反省することなく無自覺的卽自的に生活してゐる事を示すものである。全て未開人が傳統に從ふのは、祖先又は神がさうしたからであり、それが昔から一般的であつたからであり、それに叛けば罰が來るからであつて、それに從ふことが利益があり又は價値があるからではないのである。高級の社會にあつては個人の社會に對する關係は明白な對別的分極性(contradistinctive polarity)の關係である。未開の水準では、此の分極性は殆ど形成されてゐない。個人は一層完全に社會集團に融合して居る事、恰も他方に於て彼が遙かに高度の全體の運載者であるに等しい(Werner: Comp. Psych. 四三六頁)。

未開社會では基本觀念は嚴格な硬化した權威への固着ではあるが(右同書、四五六頁)、併し仔細に見れば未開社會にも社會に對立する個人の意識が全く無いのではない。未開社會にタブーや刑罰のあるのは、社會に共通な行爲樣式の傳統に背反する者がある故の事であり、又未開社會に聖なる(sacré)ものの在るのは俗なる(profan)ものが在る故の事である。マッキーバーは未開人について「彼は集團の中に存在するが併し彼は決して自己自らを見出さない」(He finds himself in the group, but he never finds himself.)と云ふが、嚴密に云へばこれは誤りである。此の事はマリノウスキー等が未開社會の犯罪や慣習の調査によつて明かに示してゐるところである。マリノウスキー等は未開人の個人意識の問題に關し、從來の之を輕視又は無視する觀方の反對の見方を强調し、未開社會の經濟生活

を見ても更にその他を見ても、個人間の關係を規定する私法や慣習が存し、利己心社會的野心も見受けられる事を種々調査報告して居る。とは云へ未開人の個人意識は文明人のそれに比すれば量質共に頗る低位にある事は否まれない。

如何なるものも、それを眞に知るには只其のものを見て居るのみでは不充分であつて、それを他のものとの關聯に於て比較檢討するを必要とする。然るに未開社會はそれの嚴重な封鎖性の故に、人は內部のものを外部の他の社會に在るものと比較對照する機會がない。內部のものは、人が之に慣れ習熟しそれの效用を充分に發揮せしめるが故に、有效便利なものとして尊重され愛好されるに對し、外部のものは、それの眞價を表はし示すやうに扱はれ得ず、それに如何なる效用があるかも悟られ難い故に、無價値無意義なるものとして輕視乃至無視され易く、斯かるものを以て生活する外部社會の人間は劣等なるもの・憐むべきものとして蔑視され易い。斯くして未開人は他を知らずして自らを獨り高しとし、自己の社會を世界の中心とする自負的態度を執り易い。斯樣な態度は諸〻の未開種族が自己を人間を意味する語を以て呼んでゐるといふ事實によつて明示される。斯かる種族は自種族のみを眞の人間種族とし、爾餘の種族を人間の名に値ひせざる劣等のものとみなすが故に、自己の名稱に人間を表意する語を用ひるのである。斯くの如きは全く他を知らず又知らざるが故に自己を高しとする卽自的態度に他ならない。此の種の態度が多くの未開社會に見られ、之に自種族中心主義（ethnocentrism）なる名稱が與へられてゐる。

未開人は呪術人と規定される事によつても窺はれる如く、彼等は全ての生活領域に於て呪術の效能を信ずるのみならず、又彼等自身呪術を行ふ。未開人はその文明の未だ開けざるが故に自己の意に從つて自然や人間を規定せんとするとき用ひる唯一の方法は呪術である。動植物の增殖を圖るのも、災害を避けるのも、幸運を招致するのも、全て呪術又は魔術に依り、斯かる術に效驗があると看做してゐるところに彼等の極度の卽自性が表れて居る。併し多くの未開社會には特別に呪術乃至魔術に長じて居る呪術師乃至魔術師が居て、漁獵の獲物を增殖し穀物の收穫を確實ならしめ風雨を左右し病氣を治療し惡魔を拂ひ神の意志を動かす（Goldenweiser, A.: Anthropology. 一九三七年、一三八頁）。

未開社會のやゝ進んだ所では特殊な職業に從事する者を特に尊敬するかと思へば、同じ職業の者が極度に蔑視し忌避される所もあるが、尊重も忌避も合理的根據のない場合が多い。アフリカの或地方では鍛冶屋は奇蹟に類する事を行ふ者として宗教的な畏敬を以て遇せられ、又往々にして最高の酋長となり或ひは王の位にまで昇り、然らずとも酋長の助言者や侍醫となつたりするが、他方別の地方では彼等は社會的に蔑視され、最も下位に位せしめられ、一般の者は此の職に從事する者との接觸を避ける（右同書、一三六―七頁）。斯くの如きも又未開人の卽自性の好例と言はれよう。

## (六)

封鎖的であり狹小である社會の內部に一生を終へる未開人は、其の社會に在る僅かなものを行爲乃至生活の對象とする他はないが故に、同一對象との接觸交涉を頻繁にし且反復するのは自然の事である。而して接觸交涉の重ねられるにつれて、其の對象に就いての領解把捉は多方面に亙り詳細になつて行く。猶又社會の狹小性の故に人は對象に感性的に接することが多いので、對象の感性的特質の把捉が微に入り細を穿つに至る、斯くの如き對象の把捉は具體的なる把捉と呼ばるべきである。從つて彼等未開人は具體的に把捉する人間（konkret fassende Menschen）であると云はれる（Werner: Einführung i. d. Entw. 二五九頁）。未開人の反省は常に具體的な布置（concrete configuration）を意味し、未開人の思想は物的な（thing-like）世界の實在に釘づけられて居る（Werner: Comp. Psych. 二四一頁）。卽ち彼等にあつては、物の屬性は其物から抽象されてそれのみで單獨に意識される事なく、常に其物と結合した儘で意識されるのである。例へば色の如きも自存的に單獨に存立せずして、それを屬性とする對象物と結合してゐる。一例を擧げれば、ニューポメラニヤの土人は黑の代りに黑鳥（kotb-kotb）なる語を用ひ、赤には血を意味する ogub なる語を用ひる等々の如きである（右同所）。斯く物の性質も具象的に觀念されるのである。

未開人の觀念は感性的な要素に滿ちて居るが故に、繪畫的な觀念（picture-like image）の特質を具有する。未開

人はこの觀念的心像（Begriffsbilder）を無數に有する。之は物の觀念であると共に又その物の記述並に具體的再現表象（representation）でもある。論理的思考の段階では明かに分れた機能である觀念と記述とが未開人の心態では融合して居る（Werner 右同書、二六七頁）。抽象とは一つの全體から部分や特質を解き離し此等をそれの本質に從つてそれだけで觀る能力を云ふが（Werner: Einführung. 一九九頁）、未開人の意識は此の抽象を殆ど行はない。假令抽象するとしても、論理的思考の行ふのとは異つた風に抽象する。又此の心性は論理的思考が用ひるのと同一の概念（抽象的普遍概念）を使用しない（Lévy-Bruhl 前掲書、一六一頁）。一つの社會集團の心性が論理以前の型に近づけば近づく程、形象概念が益々支配する（右同書、一九〇頁）。それの特殊な獨自性に於ける抽象概念は故に自然人には缺如し、その代りに彼は無盡藏の記號を有する。此等の記號はそれが具體的對象性を有する點よりして物の記述及び描寫として解されると共に、又理解並びに命名としても解される。理解と記述とは素朴な思考では融合して不可分離的な統一をなして居る（Werner: Einführung. 二三〇頁）。未開人が例へば概念的名稱に依つて或物を表示せんと企てるならば、此の概念的名稱は元來形象的な記述（bildorthafte Beschreibungen）である（Werner 右同書、三三八頁）。未開人の觀念は繪畫的な型（picture-like mold）であるといふ意味に於てばかりではなくて、それが或擴がりを有する集合的狀況に直ちに結合してゐるといふ意味に於ても具體的である。此の觀念的擴がりは「全文章的」（holophrastic）な形態を高度に展示する。全文章的形態とは一種の言語であつて、それの中で符號は只一つの限られたものを代表するのみならず、關係せる觀念の總體を含意し暗示するものを言ふ。例へばワニヤムウェシー（Wanyamwesi）族の部族獸では多くの場合單語は極めて豐富に聯關せる觀念並びに感情を含んで居るので、單なる間投詞でも、如何なる長い記述によつてなされ得るにも劣らず又はそれよりも優つて、內的心像の大なる複合體を心に呼び覺ますに役立つのである（Werner: Comp. Psych. 二七五—六頁）。

未開人の時間の觀念は文明人のそれの如く無內容で等質的連續態をなしてはゐない。未開人の言語と神話更に又世

俗的並びに宗教的な行事の中に表現された時間の關係は、未開の世界では時間は順序の抽象的尺度（abstract measure of order）であるよりも、むしろ部族の具體的な活動及び社會生活の全體の中に根ざした契機である事を指示する多量の資料を提供する。未開人が時間を表はすに用ひる語は行爲の連續態の中の特定の卓出せる事件を表はすに過ぎない（Cassirer, E.: Philosophie der symbolischen Formen. 第一部、一九二二年、一六六頁以下）。例へば牧畜をするウガンダの部族員は一日を分つ複雜な體系を有つて居るが、それは決して普遍的に適用される抽象的な圖式ではない。時間の區分は一日の仕事を構成する事柄の連續態の中に含有されてゐる。即ち六時は「ミルクを搾る時」であり、午後の三時は「水を與へる時間」であり、五時は「家畜を家に連れて歸る時刻」である（Werner: Comp. Psych. 一八二頁）。同樣に西オーストラリヤのアランダ族は一日を二十五に區分してゐる。例へば lentar は最初の日の光が東方に見える時であり、artyelboniwia は光の帶の廣くなり初める時である。altálatara は薄明の時であり、ingúntinngúnta は小鳥が囀り初める時である等々。オーストラリヤのビガミュール族では四季は夫々の時期に花の咲く樹の名稱で定められてゐる（右同書、一八二頁）。時間の原始的な體系構成は屢〻部族の特定の活動の形態と緊密に聯關して居る。ウガンダ族に「家畜飼育の時間」があれば、グリーンランドのエスキモーには「魚獲時間」があるといふ風である。潮の干滿がエスキモーの一日の區劃をなすが、それは太陽や月の運動とは何等聯關はない。トロブリアンド人は畠仕事の時間（gardening time）の極度に込み入つた體系を發達せしめた（Malinowski, B.: Coral Gardens and Their Magic. 一九三五年、五二—三頁）。

原始的空間が具體的性格を有する事は未開人の言語の比較研究によつて明かになる。未開人の空間乃至空間的關係及び方向は、高度に實質的（material）であり抽象的解釋を缺如してゐる。如何なる古代の又は原始的な言語に於ても、全然特殊的な抽象的名稱ではなくてむしろ具體的空間の實質的要素を表はす場所の名稱を我等は見出す。或ウラル・アルタイ族では體の上部・下部・背等の如き實名詞が「上」「下」「後」に當る言葉になる。同樣にスーダン語で

は「上」には大氣に當る語があり、「下」は土地又は大地によつて表現される（Cassirer 前掲書、一五七頁）。又或部族の空間はその部族のトーテミズムを基礎にしてゐる。トーテミズムを有するオーストラリアの諸部族に於ては空間は幾何學的乃至地理學的な樣相に從つて組織立てられ、いはゞ「トーテム空間」（totemistic space）に依つて組織立てられてゐる。空間は全體として部族の中に夫々獨自のトーテムを有して存在する氏族の數だけの明確に分割された範圍に區分されて居る（Werner: Comp. Psych. 一六九—一七〇頁）。これは單に地域的意味を有する地理學的圖表ではなく、一切の具體的で神話的な內容を含めた世界全體の空間的區劃である（右同書、一七一頁）。一例を擧げるならば、ウォルトヂョバラク族では空間は二つの主要集團の位置に從つて二分され、各部分空間は更に下屬集團の占居する地域に從つて細分される。此の神話的な組織立ては遙かに高い文化水準に於ても、ズニー族の宗教的觀念の中に見出される。此處では部族の七氏族への分割に從つて宇宙の空間は七部に分たれる。此の神話空間はズニー村落の七區への類型的分割に於て目に見えるやうに表現される。斯くの如くして神話的空間は吾人の幾何學化された物理的な抽象的空間とは本質的に異なり、原始空間の顯著な性質の著平特にそれの具體性を猶保持してゐるのである。

未開人の思考の具體性は彼等の宗教的觀念にも明確に表はれてゐる。宗教の原始的な形態はマナ（mana）に對する信仰であるとされるが、マナとは物理的な強さとは全く別のあらゆる方法で善にも惡にも作用し、それを所有し制御する事が最大の利益となる力である。それは超自然的な力或ひは影響であるが、併しそれは物理的な力の中に現れ、或ひは又人の所有して居る力や優越性の中にも現れる。それは何物にも定着せず殆どあらゆるものに住み且つ傳へられる。けれどもそれは文明人の考へる如き抽象的一般的なものではない。それは個々の異常物・個々の不思議な現象・個々の特別な能力のある人物の如き具象的なものである。未開人は抽象的な性能を表はすのみなる力を個々の物として觀念するのである。マナの力は彼等にあつては到る所に擴がつて居るエーテルの如き物ではないのである。斯かる非具象的なるものは彼等の思念し得ざるところである。

同一對象との接觸交渉を重ねる事長きに及び、その對象の把捉領解が具體的になるにつれて、其物のみに在つて他には無い其物獨自の諸特質卽ち其物の個性が又明確に把捉されるのは當然の事である。斯くの如く對象の個性が明確に意識され記憶されればされる程、各〻の對象はその個性に從つて扱はれ、諸多の對象に共通なる普遍性は背後に退くに至る。故にあらゆるものを具體的に把捉し扱ふ未開人は、一切の接觸交渉の對象を夫々の個別性に於て認知し處理して、一般的原則に依つて物を遇することをしない。從つて又未開人の事物の說明乃至解釋はそれの個性の敍述及び描寫から成り、一般的な法則に當嵌めてする解明ではない。自然物の特性は普遍的必然性の原理からは導き出されず、又如何なる合法則性に從つても認知されない。それ等の特性は、それ等が如何にして生じたかと云ふ個別的な來歷乃至は神話から生ずる。彼等にあつては、共通の因果的背景の代りに歷史的根據が擧示される（Werner: Comp. Psych. 三〇四頁）。未開人の思考に於ては各〻の出來事は常にあくまで個別的な光景（individual picture）であり（Werner: Comp. Psych. 三〇二頁）、多數の出來事に通ずる普遍的概念や理法は未開人の關知し理解するところではない。バカイリー・インディアンは「あらゆる人は死なねばならぬ」と問かされた時永い間默つてゐた。如何なる抽象でも、それが如何に文明人には普通の事であつても、未開人の思考の仕方には別世界の事であるが故に、白人がバカイリー人に抽象的觀念を提示する度に、彼はそれの意味を把捉するまでの沈默を乘越えねばならなかつた（右同所）。

右の如き事實によつても知られる如く、文明人にとつては同一の事物も、それの具體相が少しでも異なれば、それを未開人は同一の事物の現はれとしては認識せず、具體相の異るにつれて別々の事物として扱ふのである。例へば天體が位置を變へ、從つて外觀を異にすると、それを未開人は別々のものと解する。南アフリカのダマ族にとつては、入り日は朝日とは異なる實體である。又同樣に多くの未開人にとつては、月は夫々の位相で別々の實體である（右同書、三〇一頁）。斯かる事情よりして、未開人の言語の特質の一つとして語彙の豐富と云ふ事が擧げられる。これは

同種の物の間に極く些細な個別性の違ひがあつても、夫々の物が別々の物として別個の言語を以て表はされる事によるのである。然も此の事は自然物に就いて認められるばかりではなく、ありとあらゆる種類の物・全ての動作・全ての狀態・全ての性質に就いて認められるところである。從つて原始言語の語彙は文明人の語彙では見當のつかぬ程豐富になることになるのである（Lévy-Bruhl, 前揭書、一九二頁）。

未開人には具體的にして特殊な云ひ表はしの過剩と之に對應する普遍化の貧困との存在する事を指示する證據が多量にある。未開人は未開であればある程彼等の言語に一般的名辭の無い事が一層顯著であり、其の逆の事も認められる（Werner 前揭書、二六九頁）。社會が未開なる程一般的名稱への關心は少い。文明人が一つの語で表はすものを未開人は細分し、その各〻に特定の語を當てる。又細分されたものが單獨には類似してゐても、夫々が共に在り又は結合してゐる諸要素の全體が相異してゐれば、斯かる全體との結合に於て各〻の細分されたものが表象されるが故に、それ等のものは各〻別々の語を必要とするのであつて、各〻は上述の全文章的意味を異にするのである。アビポーン・インディアンが人の齒・動物の齒・ナイフ・短劍等で傷つけられた疵を別々の語で表はすのも此の例である（右同書、二七六頁）。

未開社會に於ける名稱は全て個別的名稱である。ブラジルのバカイリー族には鸚鵡の各種類につけた名稱は澤山あるが、併し鸚鵡といふ一般的名稱は彼等の言語には缺如する。又トロブリアンド人の間では菜園作り程重要な事はないが、農業・穀物又は菜園に當る表現は無い。彼等は確かに熟練その他の重要性は意識して居るが、併し彼等は勞働・努力・熟練に對する語を有たない。魔力の觀念は彼等の全生活に浸潤して居るが、「マナ」に當たる觀念は彼等には發見されない（Malinowski, B.: Coral Gardens and Their Magic., 第二卷、一九三五年、六六頁以下）。又南アフリカのバヴェンダ族では各種の雨に特殊な名稱がある。地理的特徴も彼等の注意から遁れてはゐない。彼等は各〻の種類の地形や各〻の種類の石・岩の夫々に特殊な名稱を有つてゐる。あらゆる種類の木・灌木・植物の種類のどれ

一つとして彼等の言語に其の名稱を有つてゐないものは無い。彼等は草の種類の一つ〳〵さへ異つた名稱で區別する(Lévy-Bruhl 前揭書、一九三頁)。次に動詞に就いて見るに、劣等社會の殆と全ての言語は在る(be, sein, être)といふ動詞を有たない。在るは單に在るのでなくて、此の場所或ひは彼の場所に在るのであり、或ひは此の時、又は彼の時に在るのであるといふ風に、極めて具體的個別的に分たれてゐるのである。「食ふ」といふ語がヒューロン族の言語では食物の異なる毎に別である。立つてゐる人を見るのと坐つてゐる人を見るのとは二つの別々な狀況であり、別々の動詞を必要とする(Werner: Comp. Psych. 二六九頁)。クラマス語には捕へるといふ爲に八種、離すといふ爲に十二種、洗ふといふ爲に十四種の語が在る(Lévy-Bruhl: Les fonctions mentales 一七三頁)。更に形容詞に就いて見るに、アイマラ族の言語には大きな又は小さな・重い又は輕い物や動物や人間を運ぶことに相應して、運ぶといふ動詞が十二種ある(Danzel, Th.: Kultur und Religion des primitiven Menschen. 一九二四年、二一頁)。

右の如く未開人が文明人は一語を以て表現するものゝ內部に種々の差異を認め、その差異に應じて別々の語を用ひるのは、文明人は認知し留意する事なき差異從つてものゝ個別性を、未開人は明確に把捉し夫々を別個に扱ふが故である。斯くの如きは、未開人がものの個別性を識別領解する事に於て文明人とは段階を異にする銳敏玄妙な能力を有つが故である。未開人は屢〻文明人の企て及ばざる感官知覺の卓拔なる辨別力を發揮するが、これは全て彼等がものゝ微妙纖細なる個性乃至差異を明確確實に把捉するが故に他ならない。黑人の駱駝乘りは足跡で通つた人が若いか年寄か・男か女か・荷物を背負つてゐたかゐなかつたか・若い女か母親かを認知することが出來る。これは視力の故ではなく、永い間續けられた微細な點への注意の實行が此の能力を生ぜしめたのである(Klineberg, D.: Race Differences. 一九三五年、一四二頁)。又オーストラリアの原住民は地上の裸足の跡を見たゞけで、自分の集團の誰が通つたかを言へる(Aldrich, C. R.: The Primitive Mind and Modern Civilization. 一九三一年、四八頁)。斯くの如き事も次の如き事情によつて未開人には可能となるのである。卽ち人間の顏の異る如く足の裏も亦異なり、從つて夫

々の足跡も亦差異を有するのであるが、その差異が極めて微少であるが故に、只少數の足に依る足跡を久しきに亙つて頻繁に眺め不斷にそれ等を比較する事を重ね來つた者のみが、其の微少な足跡の差異を認知し得るに過ぎず、斯かる認知能力は狹小且封鎖的なる社會に住む未開人にのみ發達するのである。アメリカン・インディアンは白人が認めざる無數の微少な記號の中に、食物や有利な物や危險なもの等に關する重大な又は根本的樞要性さへもある報せの印を認め得るといふが如きも（右同所）同樣である。斯樣な知覺の妙技の例は無數に擧げられ得るが、斯かる鋭敏な感覺はやゝもすれば文明人には缺如し未開人のみに具はる第六感の働きに依るとさへ考へられ、然らずとも彼等の感官は先天的な優秀性を具有するとされるが、果して然るか？　否種々の實驗の結果によつて、未開人の感官に生具的な特別に鋭い能力があるのではない事が明かになつてゐる。未開人も文明人も自己の慣れ親しんで居るものに對しては特別に敏感になるのであつて、未開人の感官の鋭さは彼等の社會の封鎖性狹小性よりする同一對象との接觸交渉の長期に亙る反復に基づくのである。

未開種族には一般に計數の能力が缺如し、往々にして四、五以上の數の觀念すら有たざる種族も少くない。併し乍らこれも彼等に計數の能力が先天的に缺如する事によるのではない事は、數の觀念の未發達なる種族の子供を文明社會で育てれば、彼は文明人の子供と同樣の計數能力を示すに至る事によつて明かである。然らば未開種族に於ける計數能力の缺如は未開人の社會的生活條件の特殊性に基づくと見られるべきである。そも〳〵數は何等かの點で等しいと見られるものが幾つか在るときに始めて必要になる。只一つしか無いものは數へる必要はない。然るに未開社會に存在するものは、何れもその個性に於て捉へられ扱はれるが故に、夫々の物は未開人にとつては何れも唯一無二のものである。あらゆるものが夫々唯一無二のものである未開社會では計算は全く無用である。又從つて全く無意味である（Werner: Einführung. 二四八頁）。これ卽ち未開人に計算能力の發達せざる所以である。アビポーン・インディアンは彼等の犬の一匹が其の群から居なくなつてゐるか如何かを數へる事なしに言へる。これは彼等には數へる事の必

要がないからである。何となれば彼等はあらゆる家畜を特色ある具體的な仕方で經驗してゐるからである（Werner: Comp. Psych. 二八八頁）。假令全く未知な對象物又は人間が問題となる場合でも、未開人はそれを明らかな特徴を有つてゐる個體の多樣態として認知せんと努める。ツルンワルドはソロモン群島人に就いて次の如く報告して居る。即ち、若し新たに到着した人々が言ひ表はされねばならぬ場合には、五人の人が今來たとは言はない。假令それ等の人々の名が知られてゐなくとも、右のようには言はないのであつて、大きな鼻の人・老人・子供・皮膚病の人と小男とが外に待つて居る、といふ風に言ふであらう（Thurnwald, R.: Die Psychologie des primitiven Menschen. Hdb. d. vgl. Psych. hgb. v. Kafka. 一九二二年、二七三頁）。

右の如く未開人が對象の微細玄妙なる個性まで鋭敏明確に把捉辨別するのは、對象の有する特質を微に入り細を穿つて遺漏なく意識し認知するが故であるが、對象の特質が意識される事多きにつれて、通常其の對象の意識は優れて直觀的になる。故に未開人が彼の社會の物に就いて有つ意識は高度の直觀性に富むは當然の事である。しかのみならず、狹小な未開社會に於ては、人は對象に感性的に接觸するが故に、對象の知覺表象は、常に必ず其の對象の感性的な特質を併せ備へてゐると共に、此の對象の知覺の長期に亘る反復は、其の對象の記憶表象をも其の對象の知覺表象と同樣にその對象の微細な感性的特質まで悉く包括するものたらしめる。故に未開人が或對象に就いて有つ憶記表象はその對象の知覺表象と同樣なる直觀性を有するは自然の事である。即ち未開人が何物かを憶記する時、彼は恰もその對象が現前し之を知覺するが如く鮮かに從つて直觀的に表象するのである。未開人の思考を構成する表象は多く斯く直觀的なるが故に、未開人の思考は直觀に於ける思考（Denken in der Anschauung）であると云はれ、又素朴なる思考の各種のものにとつては、感性的對象的なるものへの復歸が特色をなし、之から未開人が解き離されることは容易でなく又は不可能であるとも云はれるのである。

文明人の意識にとつては、感性的な知覺の機能と普遍的なるものを抽象して把捉する論理的概念的な思考の機能と

の頗る本質的な分離が存立してゐるが、素朴な未開人にあつては、文明人の明確に形成された精神的意識に於ては別々な相として重なつてゐる感性的なものと概念的論理的なものとは、未開人の體驗に於ては或度まで一つの層を成して未分化の狀態で與へられてゐる。此の一層性卽ち此の思考が直觀的なものから浮び上らざることと（Unabgehobenseiu des Denkens aus dem Anschaulichen）こそ所謂具體思考の意味を作り上げるところのものである（Werner: Einführung. 一七一頁）。實に各〻の原始的な概念は同時に一つの直觀像である。自然人の素朴な對象的思考は、感性的な形態から又知覺から解き離されてはゐないのである。未開人の思考の具體的な一例を示せば、上述の特定の色を表はすにその色を特に鮮明に具有する對象物の名稱を以てする事實も、或色がそれを一の屬性として包含する對象物の直觀像から抽象し出されて、その色のみが單獨に孤立して觀念される事なく、常に其の色を呈示する對象に卽して客觀的に表象される事を示すものである。

未開人の意識が極めて直觀性に富む事は、彼等は直觀像（eidetisches Bild）なる特殊な心像を有つ場合が屢〻あるといふ事實によつても證示される。此の直觀像といふは記憶心像（memory image）と知覺表象（percept）との兩者の性質を具へ、兩者の中間に位する心像である。これは知覺の有つ鮮明性と端的な衝力（impact）とを有つが、他方想像による影響を蒙る點に於て知覺表象や殘像と異なる。斯くの如き特殊な直觀的心像が生ずるのは、知覺の直觀性が保持され易いといふ事に基づくであらう。斯樣な直觀像が未開人によつて有たれる事によつても知られる如く、彼等の想念の多くは、嚴密に直觀的ではなくとも、直觀の領域の外邊に確かに接してゐる。彼等にあつては、文明人の心態に於けるよりも遙かに密接な機能的關係が知覺表象と純粹の心像との間にあつて、兩者の分化は少いのである（Werner: Comp. Psych. 一四五、一四六、一四八頁）。

未開人にあつては、對象の特質が抽出されて單獨に表象されないやうに、對象に外的に結合されてゐるものも分離されずに對象と共に一つの全體をなして表象される。從つて原始的思考に於ては人間を外界から遮斷する境界が頗る

不明確である（右同書、四二一頁）。これは文明人にあつては、人自身とは別と考へられるものも未開人には常に結合して全體的に經驗し表象されるので、それの言語に於ける表現が全文章的であると共に、それの何か一つに接すると、他の物が現前するが如く直觀的に表象される爲に、人が常に有つてゐる物も、その人と結合され同一視される事が多い事情によると考へられる。此等の物が人の輪暈（halo）をなし、人と其の輪暈とが相寄つて一全體をなし、別々には考へられなくなるのである。此の故に自我及びそれの輪暈の如何なる部分も、魔力に關する限り同價値を有するに至る。斯くて各部分は全體を代表するものであり、自我輪暈（ego-halo）の或部分が如何に隔たつてゐようとも、それが影響され又破壞されゝば、全自我自身が同樣に犯される事になる。此の現象に、人の有つてゐるものに仕掛けた魔術に依つて直接その人自身に呪ひをかけるといふ事も依存するのである（右同書、四二三頁）。オーストラリヤ人が彼の敵の髮をその敵の死を生ぜしめる爲に燒く場合、これは象徴の一形式でもなく、又此所には魔術の行爲と死の眞實の出來事との間の時間的に確認された別があるのでもない。此の髮を燒く事は敵を殺すといふ行爲そのものなのである。敵の死といふ願望された出來事はそれに先だつ魔術に依つて因果的に條件づけられてゐるのではない。一度儀式が完遂されゝば、此の未開人の考への範圍内では、その敵は實際殺される事、その顏がブーメランゲで打割れた場合と同樣なのである（右同書、三〇七頁）。

右の如き物とその所有者との一體化乃至同一視が、上述の未開社會に於ける個人の死と共に彼の所有物を破棄するといふ習俗を生むのである。或個人が死んでも、彼の持物に接すれば、その物と共に一つの全體を成してゐた彼自身が髣髴として現前する。併し死によつて一つの轉化を經た彼は生前の儘の彼としてゞはなく、「生前の彼に加へるに何等かの超自然性を以てせるもの」として現前する。此の超自然性は、恐るべき死の印象や死を生ぜしめたと考へられる魔的存在者と死者との結合の確信等に基づくものであるが、此の恐るべき超自然性の故に、死者の現前再來は恐怖忌避の對象となり、此の現前再來の機緣となる死者の持物との接觸を恐れて、其の持物を破棄するのである。未開

社會では斯く人と物とが結合相卽せしめられるばかりでなく、物とそれの名稱とも亦結合相卽される。未開の領域では名稱は單なる記號ではない。名は物と密接の關係にあるのみではなく、それは對象物自體の一部分である。名と物との同一化（identification）はブラジルのバカイリー・インディアンによつて例證される。彼等の新しいものの本性に透入せんとする欲求は、それを齎した人がそれを作つたのか？　その物の名は何といふか？　といふ問に盡きる（右同書、二五四—五頁）。從つて未開社會では、人全體がその人の代表的な構成部分としての彼の名に影響を與へることによつて、魔術的に變化せしめられ得ると信ぜられるのである（右同書、四二二頁）。

一般に夢は、荒唐無稽なものであらうとも、知覺乃至空想の表象を素材として之に變容轉化を加へたものによつて構成される。從つて素材となる表象が直觀的であり生動性を帶びてゐる限り、之を基礎として成立する夢の表象も亦極めて直觀性に富み、知覺表象の有つが如き現實性を具備する事は自然であると共に、斯かる夢から醒めて後も、夢が明確に鮮かに意識に留まり夢の中のものが具體的直觀的に表象されるが故に、その物が實在するが如く感ぜられる蓋然性が頗る高いと言はねばならぬ。此の理によつて、原始的思考に於ては夢は屢〻實在的なものとしての價値を與へられるのである（右同書、三三九頁）。未開人にあつては夢の領域も分化を缺如する。そして主觀的並びに客觀的な實在の中間に位する。未開世界の如何なる場所に於ても、夢が主觀的な意味を有ち得る事が見出される。例へばニューギニアのカイ族の間では、夢で自分の隣人に對して過を犯した者は、此の非行を悔悟して苦行をなさねばならないのである。更に又多くの未開人の信ずるところに從へば、希望する出來事を單に夢に見るだけで、それを「實現する」事が可能である。クヰーンスランドのオーストラリヤ人が敵を殺さうと願望すれば、彼の考へ方では、彼はその者の死を夢に見さへすれば足りるのである（右同書、四〇七、四〇八頁）。彼等が斯かる願望を容易に夢に見得るのも、其の對象が日常生活に於て直觀的に心に刻まれ鮮かに意識に現れ易いからであらう。猶又全てを直觀的に體驗し直觀的に記憶する未開人の夢は、現實の體驗がその儘に近い形に於て再現され易く、此の點よりしても彼等の夢は現

實生活から離れる事遠くなく現實と矛盾する事も少い爲に、彼等にあつては夢と現實とのけじめのつき難い事が、彼等をして夢に客觀的實在性を認めるに至らしめるのであらう。

以上の如く、體驗・意識が直觀性に富む未開人にあつては、社會生活を規定するあらゆる物が又直觀性に滿ちてゐる事は改めて云ふを要しないであらう。今茲に法制をとつて見ても、この事は明かに認められる。卽ち早期の諸民族の法には明瞭で直觀的な思慮が特有であるといふ事が既に早くから指示されてゐる（Savigny, F. K. v.: Von Beruf unserer Zeit für Gesetzgebung und Rechtswissenschaft, Thibaut und Savigny, herausgegeben von Jacques Stern. 一九一四年、一三三頁）。これも若き民族の社會の封鎖性狹小性に基づく事であつて、斯かる社會も開放され廣大になるにつれて、立法による抽象的にして一般的に妥當する法が現れるのである。その以前には社會の全體從つて個々の法的行爲と社會の全生活との關係が個別的直觀的に領解把捉されるが故に、慣習に立脚するその時々の個別的な決定で事足り、抽象的な一般法は不要であつたのである。

## (七)

およそ感情情緒は具體的直觀的な表象に伴ひ、抽象的非直觀的な觀念表象には伴ひ難いものである。從つて具體的直觀性に富む未開人の意識は豐かな感情情緒を伴ひ易い。故に未開人の思考は具體的なるのみならず同樣に情緒的でもあると云はれ、又未開人の具體的にして情緒的な思考（concrete and affective thinking）が云々されるのである（Werner: Comp. Psych. 三〇二頁）。彼等の心的活動は、觀念心像が喚起される感情情緒を離れて、對象物の觀念心像を單獨に考察することを可能とするまでに、十分に分化してはゐない（Lévy-Bruhl: Les fonctions mentales. 二八頁）。而して强い感情情緒は身體の運動を伴ふのが常である。强い喜びや悲しみは必ずそれを示す表情を伴ひ、激怒は對象を怒罵し又は毆打せんとする行動を、愛情は對象を愛撫し又は抱擁せんとする行動を伴ふ。特に現實活動

と假象の觀賞との區別なく、全てが現實であり實踐の領域に屬する。未開人にあつては、情緒は常に運動と結合するは當然である。未開人の理解把捉は單に對象的であり個別的具體的であるのみでなく、それの中には又情緒產出力(produktive Kraft des Affektes)があると言はれるのは(Werner: Einführung. 二六二頁)、情緒によつて運動動作が產出される事を意味するのである。誠に客觀と主觀・知覺と純粹な感情・觀念と行動等々の分化は比較的僅少であるといふ事は、未開人の心的生活の特色である(Werner: Comp. Psych. 五九頁)。從つて未開の領域に於ては知覺過程は高度に混合的(synaretic)である。混合性は未開人の情緒の特色をなし、原始的な情緒的經驗は高い段階に於けるよりも遙かに緊密に身體的運動活動に關聯してゐるのである(右同書、八二—三頁)。未開人の心態では思考の過程は常に感覺運動的又は情緒的な型の機能と多少とも完全に融合して現れる。本來の思考の知覺・情緒並びに運動活動からの嚴密な分離の此の缺如こそ、所謂具體的にして情緒的なる意識を決定するものである。具體的にして情緒的なる思考は故に未開人の心の混合的な活動の特色を表はす一例である(右同書、二一三頁)。右の如く情緒があらゆる意識生活を規定する未開人にあつては、事物と結合する事に於て具體性を有する時間が、此等の事物に隨伴する情緒とも結合するは當然であり、事物に代つて情緒が時の觀念を規定する主要因素となることもあり得る筈である。卽ち時間は一定の情緒的な性質に充されたものとも考へ得られる。例へばアフリカの諸部族では時間は幸福な及び不幸な時期に區分されてゐるが如きも(右同書、一八四頁)。右の事を表はす一例である。更に原始的空間に就いても同樣に情緒の伴ふ事に就いては、改めて言ふを俟たないであらう。

右の如く主情性の著しい未開人は、情緒によつて知覺從つて又知覺されたものゝ表現を種々限定左右され易い。例へば知覺に隨伴する感情價値の大なるものは大きく又それの小なるものは小さく描く事が多い。これは感情遠近法と呼ばれるものであつて、文明人の遠近法を全く無視せるものである。例へばブラジルのバカイリー族の或者が探險隊を描いた繪では、副官だけが非常に少さく描かれた。これは副官だけが他の隊員よりその地位が低いと考へられたか

らである。斯様に未開人の知覺やそれの再現を規定する感情情緒は、彼等の願望や恐怖等々によつて限定され易く、此の事の爲に遠近法が益々客觀的な釣合から離れて變容され易い。オーストラリ十人の繪やパプア人の繪或ひは先史時代の多くの繪は、頭が屢、人間の全部を示す。斯くの如きは此等のものが特に印象的であり、彼等の關心を牽き情緒を搔きたてること大であるが故であらう。此等の例によつて示される如くに、知覺された物の繪畫に於ける再現が感情による客觀性の變容を示すのは、對象の知覺そのものが感情によつて變容される事に基づくのであつて、未開人は自己が恐れる對象は自己を威し脅かす相貌・態度を有するものとして、又自己が親しみ懷しむものは、自己に親しみ微笑みかけるものとして知覺する。然も此の事は生あるもののみならず生なきものに對しても同樣であり、茲に於て未開人にはあらゆる對象を喜怒哀樂を表はす相貌あるものとして知覺するといふ特質が有たれるものである。斯くて自然人は知覺された世界を面貌に於て (in Gesichtern) 體驗する。即ち彼は世界を相貌的に (physiognomisch) 體驗するものである。

一般に魔的存在者は超自然性を具有するが、これは自然的容觀的存在を變形變容せるものとみられる。此の變形變容は人間の情緒によつて生ぜしめられるところが大であり、魔的存在者の出現は相貌的な幻想に基づくところが少くない。此の點よりして魔術は深く一般的な根底を情緒的思考に有するものである。原始的知覺の本質そのものに既に魔術的な性格がある。相貌的な世界は、それが相貌的であるといふその事の故に、既に廣義に於て魔的であるが、魔術の領域にある物や人は魔的實體 (demonisacal entities) であり、その實體が如何なる物になるかは、如何に情緒が環境の形態づけに參與するかによつて定まる。魔的實體は人間の恐怖と願望との交互作用の反映である。故に如何なる未開社會に於ても通常情緒の支配を提示する活動が魔法の實行に發展するのである (Werner: Comp. Psych. 三三七頁)。情緒の强いものは直觀的であり生動性を有する表象に伴ひ、その表象を魔的に變容することによつて、茲に魔的實體の形成となるのである。斯うして神話的な把捉や魔術的な思考への道は、未開人の具體的直觀的感情的な

把捉の仕方から遠くはないのである。

一般に對象の意識に伴ふ感情情緒が強く且明確であるならば、若しも一對象の意識に伴ふ感情情緒と或他の對象の意識に伴ふ感情情緒とが極めて類似する場合には、此等二つの對象が物としては全く異なり、又兩者が因果的にも場所的にも何等關係がないとしても、感情情緒の類似性のみで結合して考へられ、終には同一物とされるに至る事は可能である。主情性の強い未開人の思惟は、それが單に事物關係に基づく結びつき（sachliche Zusammenhänge）を形成するのみならず、同樣に又情緒關係に基づく結びつき（affektive Zusammenhänge）をも形成するといふ事に於ても、複合性を有する。花と星・人と動物等を夫々一つにするが如きに見られる結びつきは、事物的な基礎に立脚するものではなくて、感情的な基礎に立脚する同一視である。それは情緒的思考によつて形成された聯關である（Werner: Einführung. 二六二頁）。比較的原始的なズニー・インディアンは各〻の方角に特定の色を當てゝゐる。黄は南、赤は東、白は北、黑は西に屬する。同樣な色の體系は古代のメキシコにも存した。此の色と方角との對應が普遍的である事からして、これが根本的な心理的現象である事は疑ひない。斯くの如く對象の意識に伴ふ感情の同一性の故に、それ等の對象が異なるものであり乍らしかも一つのものであるとする事を共感情（synaesthesia）と呼ぶが、この共感情の基礎は、感覺の分離した領域を共に結びつける事を許す未分化の知覺經驗であり、高度に分化し客觀化した經驗の形態には缺如するところのものである（Werner: Comp. Psych. 八八頁）。未開人の體驗の特色をなす強い主情性によつてのみ表はれる共感情は、主情性の基礎を缺く現代人には表はれ難いのであるが、特に知覺が鋭く感情の異常に強い藝術家や官能の享樂に耽溺するデカダンには、往々にして此の共感情が見られる場合がある。此の種の官能の異常に興奮し易い人々は、特定の色を見れば特定の音覺を持ち、特定の味に特定の色を想ひ浮べるといふ類の事が少くない。これを色聽・味聽等と呼ぶが、思ふに斯く領域を異にする感覺が結合して意識されるのは、結合する感覺に伴ふ感情情緒が明確强烈であり、しかもそれ等が相互に類似合致して居るところあるが故であらう。耽美派藝術家

の或者が母韻には獨特の色があるとか、諸〻の酒を順次飲む事によつて或音樂を聽く思ひがすると云ふが如きも、右の如き共感情の表はれと見られよう。

以上によつて證示された未開人の著しい主情性は、人と人との間の行爲及び關係にも表はれ、それ等を規定すると大なるべきは當然である。以下此の事を諸〻の未開社會に就いて明らかにしよう。先づアイヌに就いて見るに、アイヌは他人の疾病や死に對して部落の全成員がそれを悲しむ。そして一家を代表して家長としての夫が見舞ひ又は悔みに行く。夫が不在若くは事故ある時は、妻が代理する事もある。親族は末々までも睦び合ひ、遠所に在りと雖も云ひ交して因緣絶ゆる事が無いと謂はれる（坂倉源次郎、北海隨筆、大友喜作篇、北門叢書、第二冊、六三頁）。又歩行の叶はぬ老人を負ふて濱に到り、漁りするを眺めしめ、肴を獲る毎に靜かに之を老人に告げて慰ましむる者、盲老の母の手を引いて渚に連れ出して慰め勞る事甚だ切なる者の話等が、種々に傳へられてゐる（佐藤玄六郎、蝦夷拾遺、大友喜作篇、北門叢書、第一冊、二七五頁）。更に又平生母に仕へる事甚だ柔淳で、少しも母に反對することはなく、常に妻及び子供達に言ひ聞かせ、自分が稼ぎに出る日は妻を母の許に殘し、妻が薪採りする時等は、自分が母を介抱し、夫婦は必ず一人母の傍に附いてゐて、協力して忠實に仕へ、母が稀に外出したいと言へば負つて行き、歸らうとするまで附添い慰めたといふ樣な情愛の深い者の話も傳へられて居る（大内金庵、東蝦夷夜話、大友喜作篇、北門叢書、第五冊、四四三―四頁）。

北海道の未開種族に於て認められる主情性は、アフリカの未開種族にも亦認められる。例へば、ブッシュマン族の子供に對する愛情は如何かといふに、次の事によつて充分覗はれるであらう。卽ちブッシュマンの女を奴隷にせんと欲するヨーロッパ人は、その子供を盜みさへすればよい。母親はその子供と運命を共にする爲に、我が身を奴隷に陷しいれるであらう事は確かである。ホッテントット人も全て相互に親切であり氣だてがよいと言はれる（Kropotkin 前揭書、九八頁）。更に極北の地に住むエスキモーも、その母の子を愛する事は一入であると云はれ（世界地理風俗

大系、第一四卷、一〇五頁)、同様に亦アリュート族は食物の打續いて不足する間にも、先づ第一に自分の子供に心配してやり、自分は何も食べなくても、自分の持つて居る物を全て子供にやる(右同書、九七—一〇六頁)。南洋の原住民も亦同様に主情性に富む。ニューヘブライズ諸島の住民の母や叔母は、特に愛してゐる子供の死んだ時には、その子をあの世でも保護する爲に自殺せんとする事がある。ボルネオのダヤーク族は、女子を優しく扱ふので知られてゐる(右同書、一〇八、一一六頁)。更にオーストラリヤ原住民に於ても同様の事が種々報告されて居る。彼等にとつては、父權・夫權は絶對的であつて、父は妻及び子供を如何に扱つても、殆ど社會の干渉を受けない。而して妻は各種の苦役を負はされてゐる點よりして、夫の奴隷の觀さへ呈する。併し乍らこれは慣習的に定まつてゐる分業によるものであり、女性の虐待・夫婦愛の缺如の表現とは見られない。夫婦愛が全く缺如するとの報告は質量共にその反對の報告に劣つて居る。これに反し夫婦愛の遍在を說くものはその數多く、その中の若干は最も信頼すべき權威者によるものである(Malinowski, B.: The Family among the Australian Aborigines. 一九一三年、七五、八三—四、二九七頁)。子供に對して父はその絶對的勢力を排壓的に發動せしめる事なく、むしろ溺愛的に可愛がる。母も亦同様である。子供が泣けば、色々の人の手に渡され愛撫し宥められる。食物の良い部分は子供に與へられる。死せる子の名を呼び乍ら夜の森をさ迷ふ母親や、死兒を多年袋に入れて背負續けた親等もある。親は子供の爲には何時でも自分の生命を危險にさらす。子供は親の誇りであり愛の對象であり、親の好意を得る捷徑はその子を褒める事である(右同書、二三八—五〇、二七〇—一頁)。以上の如き未開人の主情性を示す諸〻の事實を擧げた後クロポトキンは、概括して次の様に云つて居る。「私は野蠻人とその子供との間の眞に愛情の溢れた關係の例で、幾頁も一ぱいにすることが出來るだろう。旅行者は常に此の事を語つて居る。彼處では母の深い愛に就いて讀まれ、其處では蛇に咬まれた子供を背負つて森を狂氣の如く走り廻る父を見る」(Kropotkin 前掲書、一〇八頁)。

## (八)

未開人は社會生活に於て著しい主情性を示すのみならず、彼等の豐かな感情情緒は、他に對して常に肯定的促進的に發動する事も右に述べたところによつて明かである。これは未開社會の構造及び人間の本性よりする必然的な結果である。人間は他人の感情情緒を生けるが儘に領解することが深ければ深い程、その感情情緒によつて動かされざるを得ない。自分の爲せるところの故に他人の嘆き悲しむ事甚しきを日々夜々に見れば、不快の念・悔恨の情を禁じ得ざるが人情であり、自分の爲せる事の故に他人が欣喜雀躍するを見ては、自らも滿足歡喜の湧くを覺えるも亦人情である。故に生活を共にする者の感情情緒を全て具體的直觀的に領解する未開人が、仲間の社會成員の悲哀痛苦を避け歡喜悦樂を招致するやうに行動せんとするは當然である。又仲間との生活の共同の多い未開人は共にする活動の成果の享受も亦共にし易く、從つて彼等にあつては仲間との利害の一致が多いが故に、此の點よりしても、仲間と喜悲を共にし易い。從つて彼等は自ら仲間の憂患を避け喜悦を增進せんとする傾向を有つのである。猶又假に主我的な未開人があつて、仲間に損害を與へることによつて自己に利を收めることが出來たとしても、社會內部のことは全て社會成員に領解さされる未開社會にあつては、その損害及び利益は直ちに一般成員に知られ、その主我的なものは指彈排擊の的となり、同樣の主我的行爲を再びし得ざるに至るであらう。此等の諸事情によつて、未開社會には主我的な行爲や之に基づく鬪爭や抑壓等の如き社會生活の調和靜穩を害する諸因素は現れないのである。

未開人の社會的連帶の高度の發達と彼等相互の心を滿して居る氣だての良さとは、思ふ儘に多數の確かな證據で不動の事實とされ得る（Kropotkin 前揭書、一〇七頁）。未開人は溫和な感情を缺如するといふ通俗的な考へは、彼等と文明人との接觸の外面的な而して通常敵對的な特性から發する誤謬である。實際文明人の都市に見出されるやうな困窮者と富裕者とが後者が前者を救濟すべき義務を何等感ずることなく並存するといふ事態は、多くの未開人にとつ

ては驚愕に値する事柄であり理解出來ぬものがある（Cooley, C. H.: Social Organization. 一九二四年、四一―二頁）。ヨーロッパ人が初めて原始人に出會へば、彼等は通常その生活を戯畫化するけれども、知性ある人が原始民族の許に永い間留まれば、彼は彼等を地上の「最も親切な」又は「最も氣高い」人種と書くのが常である。全く之と同じ言葉が一流の權威者達によつて世界各地の未開種族に就いて用ひられてゐる。斯かる大なる賞讃の頻出は既にそれのみで幾冊もの書物を成すに足りるのである（Kropotkin 前掲書、九八頁）。以下その若干の例を擧示するであらう。

プリュート人は約束させる事は容易ではないが、彼が一度約束すれば、彼はどんな事があつても之を守る。干魚を遣るといふ約束を忘れてゐた者がそれの無くて困る時期にそれを屆けた如き例は珍しくない。又オスチャーク人及びサモエード人は醉つてゐる時でも、彼等の爭ひは云ふに値するものではない。百年來ツンドラの中には唯一つの殺人も行はれなかつた。彼等の子供は決して互に爭はない。人はあらゆるものを幾年もツンドラの中に放置出來る。食料や火酒さへも誰も之に觸れないであらう（右同書、一〇六、一〇七頁）。更にエスキモーの少年達は性善良で眞面目である。不撓で氣鋭の精神を持つて居るにも拘らず、彼等は不思議に喧嘩をしない。從つて小さい者苛めをしない（世界地理風俗大系、第一四卷、一〇五頁）。社會生活に於ける親和友愛は、アメリカン・インディアンについても種々報ぜられてゐる。或者は、友達に對してより以上親切な人間は地上にはないと言ひ、又他の者は次の如く言ふ。即ち、彼等は自己の社會のあらゆる者に對して親切且寛厚であつて、自分の食べる食物の最後の一片までさへも惜しむことをしない。自然の學校は、汝のしてほしいと欲する如く他人に爲せといふ簡單な規則を敎へる。更に又他の者は、イロクォイ族に就いて、彼等の間では、孤兒に對する親切・あらゆる者への歡待・一般的友愛は彼等の宗敎を司る者によつて揭げられた敎理の中にあつたと報告して居る（Cooley 前掲書、四一頁）。

南洋の未開種族の例を擧げるならば、首狩人種として有名なボルネオのダヤーク族の間でも、强盜や竊盜は全く知られない。彼等は又頗る眞實を愛する。同じ事は又マレー人に就いても云はれ得る。ニューギニヤ西岸の住民の生活

の原則とするところは、如何なる口實のもとにも決して眞實ならぬ事を口にせぬ事、又守れぬ約束をしない事であつた（Kropotkin 前揭書、一〇一頁）。アメリカに於ても同樣の例が少くない。例へばブッシュマン族をヨーロッパ人が見出した頃は、彼等は時々結合する小部族を成して生活してゐたが、彼等に就いては、仲間に對する愛情・感恩の心・親切・非利己的な性質・約束が信賴出來る事・親の情愛等が何れも存在する事が報告されてゐるのである（右同書、九六—七頁）。

未開社會に於ける相互促進的なる愛情と之に基づく相互扶助に關しては、此の方面に於ける主要な權威者とされるウェスターマークもその著「道德觀念の起源と發達」（Westermarck, E.: The Origin and Development of the Moral Ideas. 一九一二年）の第一卷の數章（同書、五四〇頁以下）を親切及び相互扶助の普遍的存在の證據を以て充たしてゐる。彼は未開人は母の子に對する・又子の親に對する・更に兄弟親戚間の親切と扶養との義務を認める事を示した後、語を進めて次の如く言ふ、即ち、窮乏せる者を救ひ危險に陷つた者を庇ふ義務が、家族と氏族との限界を越えて及んでゐる未開人は、通則的に彼等自身の生活共同態又は部族の成員に對して親切であるとして記述されてゐる。彼等の間では慈善は義務として命ぜられ、物惜みせぬ事は德として讃へられる。實に相互扶助に關する彼等の慣習は屢〻我等自身のそれよりも遙かに優つて嚴重である。然もこの事は最下級の野蠻人にさへ當嵌まるのである。次に此の事を示す事實の若干の例を擧げるならば、アメリカン・インディアンのイロクォイ族は餓えた者に食を與へる爲に自己の食事を投げ出し、疲れた者の元氣を恢復せしめる爲に自分の床を空け、自分の着物を着る物の無い者の爲に差出すであらう。次にホッテントット人に就いて知る者は、出來る限りの勞を込めて彼等の親和性と彼等の一つの物でも分け合つて相互に扶助せんとする態度とを賞揚する。ホッテントット人の一人が何か貰へば、彼はそれを直ちに全ての居合せた者に頒ける。之はダーウィンがフォイエルランド人に於て頗る驚かされたのと同じ習慣である。彼はどんなに餓えてゐても、一人で食べるわけにはいかない。彼は通りかゝつた者を呼び寄せ、自分の食物を頒けて

やる。コルベン（Kolben）が此の事の驚きを表明した時、彼はこれがホッテントット人の間の習俗だといふ答を得た。彼等は大いに平和で暮して居る。彼等の最大の喜びは相互に贈物をし又好意を示し合ふことである（Kropotkin 前掲書、九七—八頁）。又アイヌは、家屋を建てる場合にも、一部落内の者は手の空いてゐる限り集つて來て、或者は山から木を伐り出し、或者は野から草の蔓をとり、或ひは茅等を集めるといふが如く協働する。その協同勞働の結果作られたもの或ひは得られたものが、假令個人的所有或ひは一部の人々の所有になるものであつても、あらゆる協力を惜まぬのである。而して何等報酬を要求するものでもない。勿論その後酒を造り人々を招待するのであるが、それも協働した人々のみに限られず、來られなかつた者をも呼んで酒を振舞ふのであるが、それを目當に協力するのではない。彼等が連帶的に結び付いてゐるから協力するのである。

右によつて覩はれる如き社會成員間の相互の情愛と親切又扶助と促進は、未開社會に於ける個人と個人又は個人と社會全體との間の調和合致を保持し保證するものである。即ち未開社會の内部に於ては「各人は總員の爲に」なる規則が最高の法則をなしてゐるのである。又エスキモーでは、密接な共同生活と緊密な相互依存とが幾百年ものエスキモーの生活の特色をなす社會の利害への深い尊重を保持するに充分であつた。太平洋のポリネシヤ系の住民の居る村々に支配する調和に就いては、多くの特筆すべき事が提示され得るとも云はれ（右同書、一〇二、一〇三頁）、更に極北の地アラスカの自然に育まれて來た原始人の生活は、吾人の眼には夢の國・お伽話の里のやうに感ぜられる程で、其處には何の不安も動搖もない靜かな美しい營みが行はれつゝあるとも語られる（世界地理風俗大系、第一八卷、一五八頁）。

未開社會では、その熟知性によつて一人の事が他の全成員に直ちに具體的に知られ、知る者は皆その事に關與して、忠告や指示や助力を與へ又は協力して相互扶助を實現する。故に此所では他人の關與のない程純粹に個人的な事柄は存しない。何事も多數の者又は全員の協力・共同生活の結果である故、それの成果も關與した者同志が共に享受

する事多く、更に又責任も自ら共に負ふに至り、斯くて一人の事は又同時に他の多數の者の事であり、從つて多數の融合一體化も生じ易い。茲に於て一人の行爲の責任は彼の屬する集團そのものが負荷する所謂集團責任が未開社會に普遍的な現象となるのである。例へばオーストラリヤの原住民にあつては、局地集團の成員は「同胞」であり、故に彼等は相互の非難並びに責任と義務とを共に荷ふ(Elkin 前掲書、二四七頁)。又南アフリカの北ローデシアのバイラー族に就いて次の如く言はれる。即ち、社會成員は固有の自我(proper self)は何等有たない。若しも彼が不正を蒙れば、彼の氏族はその不正を是正せんとする。若しも彼が何か咎むべき罪を犯せば、その責任は全體としての氏族が共に負ふのである。更にアイヌに於ても同樣の事が認められる。個人間の爭ひの結果、アシンペ(賠償)として寶物を贈らねばならないのに、それが不足の場合には、親族がそれを分擔する。又親族間の鬪爭により、全部落民が皆殺しにされたといふ場合もあり、これが爲著しい人口の減少を見た事もあつた。此の場合鬪爭に直接參加しなかつた者でもその責任を免れることは出來なかつた(北海道廳編、舊土人に關する調査、三頁)。

生活を共にすること多く責任も功罪も共に荷ひ、又他人の感情・情緒を生けるが儘に具體的直觀的に領解把捉して、喜悲憂歡を一にする未開社會の成員は、あらゆる思ひを一にし情を同じくする場合が極めて多いが故に、遂には自他の區別が消失し、眞の一體感に於て結ばれた生活が實現する。特に親戚間の頗る緊密な關係の感情は未開社會では到る所で强いのであるが、例へば、病人のみならず彼の親戚も同樣に一定の食物を食べる事を慎まなければならないといふ觀念は、ギアナのインディアンの間には一般的である。又アビポーン族の間では、男は妻の姙娠中一定の食物を攝り、あらゆる激しい働きを避ける。ブラジルのボロロ族は妻の懷姙の間病人生活を送らねばならない。新たに生れる子供が病氣になると、父親も亦藥を飲む(Werner: Comp. Psych, 四三三、四三五頁)。斯くの如きは多數人の間に全て自他の別なく一體感の支配する未開社會に於てのみ、見られる事柄である。

右の如く、未開社會に於ては、個人と個人との間、個人と社會全體との間に、分離對立なく調和合致が自ら實現さ

れてゐるのは通例であるとされるに對し、他方又種々の反對説も唱へられてゐる。反對者の有力な主張者マリノウスキーは次の如く述べてゐる。卽ち、責務の遂行行程に於ける「自動的圓滑さ」が一層綿密に研究されるならば、取引には何時も故障があり、多くの叱責や罪の責めあひがあつて、相手方の仕打ちに全く滿足するやうな場合はむしろ甚だ稀である事が明かになつてくる。併し全體としては未開人は共働關係を續ける。又全體としては全ての者が自己の責任を果さうと努力すると言へる。それは一には彼が自敬い利己心に促がされ、又一つには社會的野心や情操によつて、斯くすることを强制されるからである。義務を免れることに敏捷で然も之を果した場合には得々と自慢することを忘れないのが本當の野蠻人である（Malinowski, B.: Crime and Custom in Savage Society. 一九二六年、二三頁）。未開人のパーソナリティを究明したウェルナーは結論として次の如く言ふ。曰く、未開人のパーソナリティはより進んだ段階に於けるよりは、遙かに緊密に高次の社會統一體と同一化されて居る。併し乍ら此の事は、個人のパーソナリティがそれ自身の權利に於て（in its right per se）存立する事はなく、社會全體が實在する人格的實體であつて、これから單一の人格は未だ浮び上つてはゐないといふ事を意味するのではない。只始めは個人は頗る多く集團的特質の負荷者であると同時に、頗る多く集團と全般的に融合してゐる事を意味するに過ぎない。換言すれば、低い段階の場合には進んだ段階に於けるよりも個人と集團との對極性（polarity）がたゞ少いのであり、集團的特質に對し個人的特質の特殊性の度が劣るのである（Werner: Comp. Psych. 四三九頁）。

## (九)

未開人の心は融卽の法則乃至分有律（loi de participation）なる特異な法則に從ふ事は、周知の如くレヴィー・ブルュールによつて明かにされた。表象の聯合は異るものの別々の表象が相次いで意識に浮ぶに過ぎないが、未開人の場合には、聯合する別々の表象と共に、この表象の志向する對象が一つであるといふ觀念が隨伴するのである。斯樣に

聯合する表象の志向する異なる對象が一つであるとの觀念によつて表象が聯繫されるのを、レヴィー・ブルュールは融卽の法則と呼ぶのである。此の法則によつて未開人にあつては、同一視される物の一方から得られるものは他方からも得られ、他方に働きかけて一方にその働きを及ぼすことも出來る。而して異る對象が異なり乍ら然も同一であるとされるのは、此等の對象が類似してゐるからでもなく、又此等の對象の間に因果の關係があるのでもなく、更に一が他の象徵となるが故でもない。異なる對象の一が未開人の心にとつては、他の對象と同じ神祕的な力・效果・性質・作用を發し或ひはそれを受け、從つて我等文明人の思考では不合理とならずしては混合出來ないものの間の本質の神祕的共通性があるとされるが故に、此等のものが一つであるとされるのである（Lévy-Bruhl : Les fonctions mentales. 七七頁）。此の融卽の法則によつて未開人にとつては、器物・生物・現象は、それ自身であると同時にまたそれ自身以外のものでもあり得る。從つて未開人にあつては一と多・同と異等の對立は、その一方を否定する場合、他を肯定する必要を含まないのであるが（右同所）、斯くの如きは文明人の論理にとつては明かに背理であり、從つて未開人の思考は文明人の論理を以てしては律すべからざるものである。故にレヴィー・ブルュールは未開人の思考を論理以前（prélogique）のものとする。

論理以前の融卽によつて未開人の思考が支配される事は、レヴィー・ブルュールによつて、各地の未開種族に就き、思考活動のあらゆる領域に亘つて、遺憾なく證明された。併し乍らレヴィー・ブルュールは融卽の法則が未開の低級社會を一般に支配してゐる事實を詳細に證明したのみであつて、何故に此の法則が低級社會を一般に支配してゐるかといふ問題には全く觸れず、從つて何等の論議も解明も提示してはゐない。又レヴィー・ブルュール以後融卽の法則に就いては、此の法則が未開人の思考のみに限られず文明人の思考にも見出されるか否か等種々論議されたが、何故に未開人が一般に特に此の法則に從つて思考するかといふ問題を究明した學者は、寡聞にして未だ見出されない。併し乍ら、これまで考察し來つた未開社會の諸特質と、之によつて規定され未開人の思考の特異性とを顧みれ

ば、未開社會に於ける融卽律の支配の理由といふレヴィー・ブルュール以下何人も考究したかつた問題に對する解答が自ら浮び上るであらう。

上述の如く、文明人は同種のもの同樣の事として單一の語で表はす中に、未開人は幾多の別を認めその夫々に別々の語を適用する場合が頗る多いが、他方又文明人が別異のものとする對象を、未開人は融卽の法則によつて一つのものとする場合も亦頗る多い。斯くの如く未開人の思考は全く相反する二つの方向に於て文明人のそれとは異るのであるが、未開人の思考の此の相反する二つの特異性は、共に同一の事實に根ざしてゐる。それは卽ち未開社會の封鎖性及び狹小性の故に、未開人は社會內の對象と頻繁且反復的に接觸交涉を重ねるが故に、彼等は對象を具體的・個別的・直觀的に把捉領解するといふ事實である。夫々の對象を具體的に細部にまで及んで把捉するが故に、一對象にのみあつて他にはないその對象の個別性をも明確に把捉し意識するところから、對象相互の差異が顯著になつて目立ち、從つて意識の表面に表はれるに反し、差異の顯著なものとして意識される對象に共通な普遍性は意識の背後に退き、意識され難いのは自然である。これに反して文明社會は開放的であり且廣大複雜であつて、接觸の主體も客體も社會の開放性の故に不斷に移動し變化するのみならず、社會の廣大性及び複雜性の故に接觸の對象は無數に在るが故に、文明人は同一の對象と接觸を反復する事は極めて少い。從つて接觸の度毎に異なる對象の何れにも存在する共通性は、繰り返して經驗されるので意識に上り易いが、一つの對象にあつて他にはない夫々の對象の個別性は、幾度も重ねて經驗される事がないので、明確に把捉認知されない事は不可避的である。文明人が單一の名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞等で表意する場合に、未開人は夫々多數の語を有つてゐるのは、右の如き兩者の社會の特質が根本的に相異するといふ事實に淵源するのである。

未開社會の封鎖性及び狹小性の故に、未開人は對象と直接感官によつて接觸し易く、從つて對象の感性的特質を詳細に把捉し易いが故に、未開人は對象を鮮かな直觀性を以て意識し憶記し易い。同時に對象は、それの特質の一部の

みが抽象されて把捉されるに止まる事なく、あらゆる部分を併せた全體の姿に於て把捉され、各部分は必ず常に全體に於てのみ在るものとして經驗されてゐる。從つて部分を見れば常に之と統合してゐる全體が直觀的に生動性を帶びて意識に浮ぶので、全體が眞實に目前に現れて働くのを見るが如く感ぜられ、直觀的表象に伴ひ易い感情情緒が茲にも強く表はれて、その全體が怖しいものであれば恐怖を、又親しいものであれば親和を感ぜしめ、斯かる恐怖や親和の情は之を抱く主體の行爲を規定して、種々の行爲を抑制又は禁止したり、發動せしめ又は促進するといふ實踐上の效果を生ずる。茲に於ては、部分を見れば全體を見たと同樣の效果が常に生ずるが故に、部分の存在現前は全體の存在現前と同一に感ぜられ、部分と全體とは融合し相卽するに至る。これ卽ち融卽の法則の支配に外ならない。レヴィ・ブルュールはものがそれ自身であると同時に又それ自身以外のものである事は、文明人には理解し難いとなし、融卽の法則の成立の基礎を文明人の論理を以てしては同一視し得ざる對象の間に本質の神祕的共通性ありとされる事に求めてゐるが、此の異なる對象の間の共通性の不可知的な神祕も、未開人にあつてはこの社會の特性よりして、一對象の表象に他の對象の直觀的表象が生動性を帶びて聯合され、强い感情情緒を伴つて、主體の實踐を種々規定する事第二の對象が直接現前せるに等しいといふ事情によつて解かれるであらう。此の事情によつて或物の一部がその物全體と同一視されて融卽の法則が支配すれば、他の一部も亦同樣の法則によつて全體と同一視され易いのは自然の事である。斯くして未開人にあつては、個人の髮・爪・淚・息・聲・排泄物・精液・汗・影・足跡等々がその個人を分有するもの(participants in the individuality)となるのであり(Werner: Comp. Psych. 四二一頁)、從つて此等のものの何れに傷害を加へても本人自身に傷害を加へた事になるのである。全體と部分とが相卽せしめられ同一視されるのは、兩者の直觀的表象の緊密な結合に基づくならば、同樣に緊密に表象が聯合し結合するものも亦相卽せしめられるは當然である。故に人と彼の身のまわりの所有物とも亦融卽の法則によつて同一視され、人の畫像や彫像の如きも、之れを見ればその人が髣髴として來り浮び、その人が現前せると等しい效果を生ずるが故に、此等の像も亦その

人と同一視され、例へば北アメリカのマンダン族は、肖像がモデルと同様に生きてゐて、モデルから生活力の一部を得てゐるとさへ信じてゐる（Lévy-Bruhl: Les fonctions mentales. 四二頁）といふが如き事が生ずるのである。物の名稱も亦、物を直觀的に記憶し憶起する未開人にあつては、その物を直觀的に從つて又強い感情・情緒を伴つて表象せしめ易く、故に未開人は名稱と實物とを同一視し易い。世界と言語とは我等文明人に於けるよりも未開人に於ては遙かに緊密な關係に立つてゐる。世界は彼等にとつては云はゞ言語の形態を有ち、言語は世界の形態を有つてゐる。名稱はそれを帶びてゐる事物の一つの現象形式である。それ故我等が尊敬してゐる人の肖像をさしでがましい人に見せぬやうにする如く、未開民族は名稱を大切にし、禁止によつて一般の使用からそれを控除するのである。それは抽象機能の缺如してゐる結果である（Danzel 前揭書、二一頁）。此の場合の抽象とは名稱とそれの荷ひ手とを分つ事を意味し、此の抽象が缺如するのは、名を聞けば直ちにその人が現前する如く表象され、眞にその人が現前し活動する場合と同様の效果が現實に生ずるが故であらう。名稱がそれの實體と同様の現實的效果を發揮するが故に、名稱が實體の形態を有つと考へられるのも亦自然の事である。

未開人にあつては夢と現實又幻想と現實の如き文明人にとつては別なるものが一つであるとされるのも、夢や幻想の直觀性や隨伴感情が文明人に於けるとは格段の鮮明性・生動性を帶び、從つて此等が現實の事物と同様に未開人の行動を實際に規定するが故に、此等のものと現實との間に融卽の法則が成立つからであらう。更に上述の共感情に基づく別異なるものの同一視も亦、融卽の法則を成立せしめる一つの基礎となる。此の場合の同一視は對象の表象が生ぜしめる情緒及び之に基づく運動の類似に起因するのであつて、純粹に客觀的な思考に於ける如何なる同一視とも全く異なるが故に（Werner: Comp. Psych. 三〇二頁）、開放的であり廣大且複雜なる社會に住む爲に、對象の知覺や憶起が主體に運動を生ぜしめる程の強い情緒を伴ふやうな具體的直觀性を有たない文明人には、共感情に基づく同一性は意識され得ず、從つて此の場合の同一視は同一性の存せざるところに同一性を認めるものであり、論理に反する

ものとなるのである。併し乍ら文明人は認知し得ざる情緒的・魔術的內容の同等性（equality in the emotional-magical content）を認知感得し、斯かる主觀的內容が當に形態や色彩等の如き客觀的乃至實質的な內容と同等の明確性をもつて意識され、從つて又同等の重要性あるものとして扱はれる未開社會に於ては、對象を此の主觀的側面の同等性の故にそれ等が客觀的側面に於ては異なつても同一として扱ふは、故なき事ではないのである。

更に未開社會の有つ高度の等質性は社會成員の心の中を餘すところなく相互に領解せしめるが故に、未開人は相互に意識內容を等しくし易く、それだけまた自他の別が明確になり難いのであるが、利害を一にし生活を共にする親族同志の間では、あらゆる喜悲憂歡を共同にする事が多いので、遂に自他を一とするに至り易く、茲にも亦融卽の法則の一つの基礎が存在する。狩や戰爭に出てゐるアメリカン・インディアンは自己の天幕部落に殘つてゐる妻が或食物を斷つてゐるかどうか、或行動を愼んでゐるかゐないかによつて、運が良くもなり惡くもなるのは、出發の際の妻の誓ひにより又は誓はずとも必ず妻が斯く斯くの事をすると信ずる夫は、その事をするが故に結果する妻の特定の狀態を具體的直觀的に表象し得て、その表象された狀態の妻と共にある思ひをし、これによつて勇氣づけられ又は意氣沮喪するによるであらう。而して利害の一致・生活の共同は親族のみならず社會の全員に及ぶ事が少くない。特に封鎖性强く極めて狹小なトーテム集團に於ては、此の事は頗る多い。斯かるところに於ては一人の行爲に全員が直接又は間接に關與するが故に、責任も名譽も罪罰も社會の全員乃至社會そのものが荷負する未開社會では、個人の事は同時に社會の事なる故、個人と社會との融合相卽が成り立つのも融卽の法則の成立の一つの基礎となる。社會の開放性及び廣大性の故に社會成員相互及び成員と社會の全體との間に右の如き密接な聯關結合が存在せぬ爲に、近親者間及び個人と社會との間の融合相卽を體驗し得ない文明人にとつては、未開人が諸個人を又個人と社會とを融合せしめ同一視するのは、背理であり非論理的であり神祕的であるが、斯かる融合相卽を不斷に體驗してゐる未開人にとつては、此の同一視はむしろ自然の事であると言はれよう。

以上の考察によつて、何故に未開人は、文明人が同種同類のものとして區別する事なく同一視するものを、多種多類に區別して夫々を別個のものとして扱ふか、又何故に未開人は文明人が別種別類のものとして區別するものを、同種同類のものとし融卽の法則に從つて同一視するかが明かになつた。未開人と文明人との間の右の方向を異にする二種の差異は、何れも生具的先天的な能力の差異乃至生理的特徴の差異に基づくものではなく、共に未開社會の封鎖性及び狹小性によつて後天的に規定された未開人の對象の把捉領解の具體性・個別性・直觀性に基づくのである。從つて未開社會が文化の進むにつれて開放的になり廣大になるにつれて、未開人の心が文明人の心に對して有つ右の二方向の差異は漸次縮小する。他方又文明人でも文化の發達の進まぬ早期社會や、風土の特質その他によつて社會的空間が封鎖的であり且狹小な所では、未開人の特質とされる同種のものの細分及び異種のものの同一視を呈示するが、此等の事の詳述は紙數の都合により割愛せざるを得ない。猶又融卽の法則とそれの基礎をなす對象の直觀的表象との關係は、未開人の死者に對する態度行爲に頗る明瞭に表はれてゐるが、此の問題の論攻も他の機會に讓ることとする。

## (10)

未開社會には、それの等質性よりして、成員の社會的勢力の差異が少く、從つて平等の關係が成員間に支配するのが常である。併し乍ら此處に於ても上位に立つ者と下位なる者との差異は無いのではないが、その上位者の勢力は皆無か又はこれに近いか或ひは頗る輕微であつて、上位者が自己の恣意の儘に社會の事を處理し、又は反對を犯しても自己の意志を貫くことはなく、主要事項は社會の全員の意志に基づいて決せられるのが原則である。この全員の總意を明確にする爲に、未開社會に於ては、全員が會合して事を議し決定する直接民主制の行はれるのが常である。而して此處に於ては又等質性の故に、成員の意見が對立し多數を占める側の意見が少數者の意見を壓倒抑壓する事なく、全員一致の下に社會の總意が形成されるのが通則的である。一般に最も未開な社會に於ては、特に首長と名付けられる

には値しなくとも先に立ち世話をする限りに於て、上位者と呼ばれる者はあるが、斯かる上位者は、一切に慣習が支配する社會の傳統性よりして、傳統に通曉し傳統的生活に於て卓越し優越する長老者である。併し此の長老者も、此の社會の傳統に卽自的に從ひつゝ指導し世話をするのみであつて、傳統に反してまで自我を貫く如きことはないのである。

未開社會に於ける上位者と一般成員との關係を、以下二三の實例によつて述べることとする。エスキモーの部落には、特に首長と名付けられる者は無いが、大抵部落毎に「口きゝ役」が上に立つてゐる。或種の事柄に於ける此の「口きゝ役」の提議は非常に重んぜられる。けれども彼はそれを固執するだけの權能は與へられてはゐない（世界地理風俗大系、第二四卷、一〇一頁）。又オーストラリヤの原住民にあつては、上位者の地位は血統其他の先天的な因素によつて定まるのではなく、年齢・知識・熟練・自然的統率能力及び身體的適合性がその地位に至る手段である。上位者の地位は併し乍ら、個人が役にたゝなくなりオシマヒ（closed up dead）になつたと云はれる程老年になると失はれる（Elkin 前揭書、二五〇—一頁）。これによつても明かなる如く、人の社會的地位の上下は實力によつて定まり、その實力は一般成員によく知られ、實力の增減に從つて人の地位は變動するのである。茲にも人が個別的に扱はれる未開社會の特殊性が覗はれる。而してオーストラリヤに於ても、實力と之の表現たる業績とに於て優れる者は多く老年者である。此の事は、彼等の生活に於て重要な役割を演ずる魔術に主として老人が通じてゐる事よりしても、自然の現象である。卽ち老人は生活期間が長いので、正しい祭儀の方法や歌はるべき唄に通曉する機會を有つことが多い事情よりして、魔術に於て他人より一層上達してゐるのである。斯くて原住民と交つた事のある人間は、大なる尊敬が年齢卽ち長老者——白髮の人に示される事を知るのである（右同書、二〇六、七五頁）。右の如き上位者の地位及び勢力を更に具體的に述べるならば、中央オーストラリヤの諸部族は、一層集權化された社會が首長と呼ぶ者を假令それからまだ遙かに距つてはゐても豫告する人物たるアラテュンジヤ（alatunja）を有する。此の人物は氏族

の首位に居るが、彼の權威は年齢・經驗・能力に同時に基づく。彼はその集團の成員の上に振ひ得る一定の權力(pouvoir défini)を有たない。彼は老人達を招集し、之に常に神聖な儀式の遂行や部族の慣習に背いた者の處罰の如き重要な事柄に就いて相談する。彼が老年であり性能が優れてをれば、彼は大なる影響を及ぼし得るとはいへ、彼は會議の最も重要なそしてそれの意見に從はねばならない成員としては、必ずしも認められてはゐない(Moret, A. et Davy, G: Des clans aux empires. 一九二三年、七七、七八頁)。アラテュンジヤの主な仕事は宗教的領域にあるが、茲に於ても彼は恣意的に行爲し得るのではない。故にアラテュンジヤは禮拜の世話人である。絶對的な個人的權威を有する首長であるよりは、禮拜の諸形式に從順な世話人(ministre)である。此の原始的な世界に於ては偉大なる主宰者(la grande maîtresse)は慣習卽ち集團的であり世々相繼いで存在する慣習であつて、權威ある個人はそれの從順な遂行者たるに過ぎない(右同書、八〇頁)。又北オーストラリヤの諸部族にあつては、首長なる語又頭なる語さへも用ひるのは遠ざけられ、アラテュンジヤは儀式の指揮をするのみである(Spencer, B. and Gillen, F. J.: The Native Tribes of the Northern Territory of Australia. 一九〇三年、二〇—一頁)。卽ち北部の上位者は中部の者よりも一層特權が少い。更に東南オーストラリヤを見るに、所謂絶大な權力を振ふ統治者には出會はず、集團の諸々の大切な利益の單純なそして罷免され得べき支配人に出會ふのみである。此の支配人はその上、部族の會合に依つて構成された眞の管理顧問會によつて、しつかりと固まれてゐる。此の會は優勢な役割を有し、集團の男子にして完全に入信を濟ませた者の全てから成つてゐる。首長——吾人は言葉の便宜上斯く呼ぶが——は從つて、彼の支配人としての力を甚だしく此の會によつて縮限されるのである。之を要するに彼は自己の力を極めて屢、此の會と共同に行使するのである(Howitt, A. W.: The Native Tribes of South-East Australia. 一九〇四年、二九五—三二六頁)。

右の如く未開社會は、政治的特權の差異分化に乏しく、又上述の如く、富力の差異分化にも乏しいが故に、此等の

差異分化に基づく社會層の別が、最も原始的な段階に於ては表はれない事は、等質性の敍述に於て既に記した通りである。併し乍ら、未開社會にも性の別に基づく上下の差異は存在する。通則としては男性が上位を占め、女性は下位に置かれる。男女の地位は、各〻の性の經濟的貢獻の大小によつて規定され、これは又特に食物獲得の方法に依存するところ大である。一般に最も原始的な低狩獵民では。男女は比較的に平等であり、此の段階では、男性は主として動物性食物の獲得に從事し、女性は主として植物性食物の獲得に從事するのであるが、動物の獲得は安定性に乏しいに對し、穀物や果實等の收獲は略〻一定し大なる安定性を有するが故に、女性の經濟活動は此の社會に於ける食生活の不安を除去するに貢獻するところ大である。此の故に女性の地位が比較的高いのである。次に最も原始的な農業即ち耨耕の段階に於ては、耕作を擔當するは女性であり、此の段階に入れば、收獲物に依る生活の安定性は大いに增大するが故に、女性の地位も亦自ら高まる。しかのみならず女性の經濟的價値が大なる故、女性の親族が彼女を手放し度がらないのは自然の事であるが、斯樣な女性を妻に得る爲には、彼女の家族に對して彼女の經濟的貢獻を償ふべき代償を提供する事が必要になる。斯かる代償として、婚姻せんとする男子は、彼が妻として得んとする女性の家族の許に於て或期間勞働に從事し、その期間の果て〻後初めて婚姻することが許される制度が成立し得る。之即ち勤勞婚(Dienstehe)である。更に一歩を進めれば、女性は全く手放されず、爲に妻を得んとする男性は、妻たるべき女性の許に婿入りするの他なきに至る。之即ち招婿婚である。此等の婚姻制度の支配する所に於ては、男性は若干の期間又は終生自己の妻の親族と共に暮さねばならぬので、彼の妻の彼に對する勢力は自ら大となり、又彼等の子供の系譜や財產は妻の系統を傳はつて繼承されるに至り易い。之即ち母權(Mutterrecht, motherright)母系(Mutterlinie, matrilny)が原始的農耕の段階に現れ易い所以である。但し斯かる場合にも女性自身が大なる權力を握る事は稀であつて、女性の親や兄弟等の男性が彼女の夫よりも大なる權力を握る事が多く、又財の繼承は母方の伯叔父から相續する場合が少くない。牧畜民にあつては、男性が主要產業たる牧畜を創始し且擔當するが故に、女性の地位は自ら

低からざるを得ない。猶又遊牧の爲の移動には種々の危險が多く、外部社會との接觸に誘發される可能性の多い鬪爭に於ても、男性の力の重要性が大なる故、女性の地位は愈〻低からざるを得ないのである。

以上の概觀によつても明らかなる如く、政治の領野に於ては男性が一般的に上位に立ち、女性が權力を振ふ文字通りの母權はむしろ例外的現象に過ぎない。女性の生活空間は多くの場合に於て男性のそれに比して狹小且封鎖的なる事に於て勝るが故に、女性は又直觀性及び主情性に於て、從つて幻想や特殊な興奮に於ても勝り、此等の異常現象を媒介として超自然的なものとの交渉を爲し得ると考へられ易い事よりして、女性は男性に勝る力を有すると考へられ、此の故に女性が高い地位に立ち、大なる權力を握る場合も無いではないが、一般には、女性は不淨と考へられ易く、オーストラリヤの原住民に明確に見られる如く、女性は一切の宗教生活から除外され、社會的勢力は男性によつて握られてゐるのが常であると言はれ得る。

未開社會の年齢に依る上下の別に就いてみれば、幼少年者が抑壓酷遇される事のないのは、上述の如く子供への溺愛や戀愛の認容等によつても明らかである。併し未開社會には、年齢の差による階級的身分卽ち年齢階級（Altersklasse）の存在する場合が少くない。之は特定の年齢に達した者が、一定の試驗に合格し又は一定の儀式乃至行事を經る事によつて、特定の生活樣式を許容され又は特殊な集團生活に加入する事等に基づき、その年齢に達せざる者から區別され、種々の特權を賦與されるところに成立するものである。これは元服によつて青年の社會的扱ひが異なるにも比せられるのである。

概略的に云へば、未開社會に於ては、女性と未成年者とを除けば、一般社會成員は平等の關係に在るとみられ得る。併し乍ら文化の發達が進み社會が擴大されるにつれて、次第に不平等が現れてくる。氏族の封鎖性が弛緩し同一部族に屬する氏族間の接觸交渉が增大するにつれて、部族全體の社會性が高まり、所屬氏族の上位者が相寄つて下位者から區別されて、一つの層を成すとみられるに至り易い。次に文化の發達せざる段階に於ては、人間は自己の力に

よつてその生活の保證や改善を圖り得ざるが故に、超自然的存在者に縋つて此の事を成さんとするは自然であり、茲に於て人間と超自然的存在との中間に立ち、前者の願望に應ずるやうに後者を動かす性能を持つ者が、社會に於て最も重要な地位を與へられる事は當然である。この地位に立つ者は卽ち僧侶又は魔術師である。けれども狹小且封鎖的な社會に於ては、超自然的なる力を人間の願望に應ずるやうに動かす爲に如何なることが爲されるかは、此のことを爲す者と他の社會成員との接觸交渉が頻繁に反復されるが故に、早晩一般社會成員によつて覺知され、從つて魔術乃至特定の祕儀は之を爲す一定の人間の長く獨占するところとは成り得ない。從つて最も原始的な段階に於ては、魔術や宗敎的祕儀を獨占し續ける事によつて、一般成員から卓出した地位を保持する魔術師又は僧侶の階級なるものは成立しないのであるが、然るに社會が廣大になり複雜化するにつれて、一定の人々の間の接觸交渉は減少し、又異質性の故に人々の相互の領解も困難になり、特定の者の魔術乃至祕儀が他の者によつては覺知され難くなる。茲に於て、魔術乃至祕儀を獨占的に保持する魔術師乃至僧侶が出現し、その數が增加するにつれて彼等が社會の上層を形成するに至るのである。

更に社會の擴大と開放とは外部社會との接觸及び之によつて誘發される外部社會との鬪爭等の機會を多からしめ、此の鬪爭に於て武功を勳てた者の勢力を大ならしめると共に、勝利に隨伴する獲物乃至掠奪品は富の差異を發達せしめる。斯くて武力に於て優れ同時に又富力に於ても優れる者が、社會の上層を形成し貴族と成るに至る。他方外部社會との鬪爭はそれの結果としての捕虜を奴隷たらしめる事によつて、下層の隷屬民を出現せしめる。最も原始的な段階に於ては、生產技術の未發達の故に人間は未だ自己の生存を確保するに必要な物資以外の餘剩物資を生產し難く、從つて此の段階に於ては、鬪爭による捕虜を生產に從事せしめても、彼は只自己の生存を可能ならしめるに足りるのみの物資を生產し得るに止まり、主人の生活に資する物を提供し得ざるが故に、この段階を越えざる限り、捕虜を奴隷として保つことは無意義である事は明らかである。斯くて最も原始的な段階に於ては奴隷は存在せず、鬪爭による

捕虜があつても、それは殺されるのが通則であつた。農耕が行はれるに至つて、生産に從事する者が自己の生存に必要なる量以上の物資を提供することが可能となり、茲に於て捕虜が奴隷として生産に從事せしめられるに至つて、始めて隷屬民の階級が成立したのである。而して奴隷は家畜乃至道具として扱はれる人間であり、人間としての意志を全く無視された存在者である。卽ち奴隷は自己の意志に從つて行爲すべき自由を全く否認されてゐる意味に於て完全に抑壓されてゐる人間であるに對し、主人は奴隷に向つて恣意的に行爲するの自由を完全に保持する人間である。斯くて奴隷層の成立と共に、人類社會は原始の完全に近い自由平等の狀態から一轉して極度の不自由不平等の狀態に入るのである。但し奴隷制度に於て人間がその本質たる自由を否認され、物として扱はれるのは、奴隷とされる人間が人間として感ぜられ認知されざるが故であり、斯く認知されざるは、奴隷とされる者が外部社會からの捕虜であるによる。封鎖性の嚴重な未開社會にあつては、行爲樣式乃至文化の內外の差異が極めて著しい結果、外部の人間は內部の人間との共通性が餘りにも少く、爲に內の人間にとつては外部の人間は、自己と同樣に人間性を有する同じ人間とは感ぜられないのである。斯くて外部の人間は眞の人間ではなくて人間の意志や感情を缺如する動物乃至物件と見られ、從つて物として扱はれるも亦自然の事である。而して元來外部社會の成員に源を有する奴隷制度の存立するにつれて、社會內部の成員中からも奴隷に準じた扱ひを受ける者が現れてくる。犯罪者・負債を返却せざる者等が之である。此等の者は純粹の奴隷と異り、本來同一社會の成員であるが故に、彼等の人間性を無視して自由を全く否認された純粹の奴隷として扱はれる事はなく、從つて斯かる奴隷は同一種族の成員の奴隷とされたる者卽ち族內奴隷(intra-tribal slave)として、外部社會から捉へられ來つた奴隷としての族外奴隷(extratribal slave)とは區別され、後者に比して遙かに緩和された扱ひを受けるのが常であつた。

(二)

未開社會の土地は社會のものであり、社會の全成員によつて共有されてゐる。社會成員は誰でも自由に土地の提供するものを利用收益し得る點に於て、未開社會は土地共有制を實現してゐるのである。併し乍ら如何なる未開社會にも個別家族(Sonderfamilie)は在り、消費生活は各家族別に行はれるのが通則である。又家族否各個人の私有物も存在する。最古の個人的所有物は個人が自分で作つたもので、男子では主として道具と武器、女子では飾等がそれである。此等は人から人への個別權利(Sonderrecht)に所屬するものである(Weber, M.: Wirtschaftsgeschichte. 一九二三年、二〇八頁)。例へばエスキモーにあつては、一軒の家の中でも、小舟は夫のものであり、壺は妻のものである爲に、他の者に賣渡すことは出來ない。又子供の所有物も處分するにはその同意を得なければならないが、更に二人の獵師が默狩りをした場合、それを殺した方が前の半分を、又それを手傳つた者が後の半分を得るのであり、その際他人が居合せれば、その者は後で肉を贈られるだけで、その分け前を表面上は要求することが出來ないのである。斯かる點よりして個人の所有權が存在してゐる事が認められるのである。但し此の種の個人的所有物も相續の對象とはならず、物とそれの所有者とが融卽の法則によつて一體化され相卽せしめられる爲に、所有者たる個人の死と共に破棄され、それ故に未開社會には富の蓄積が行はれない場合のある事は上述の通りである。而して未開社會には右の如き個別的所有權の存在にも拘らず、贈與や共同利用乃至貸借が頗る多い爲に、共產制度が存在する如く見える場合が少くない。これ一つには此の社會に於ては、各個人の個別的な事情卽ち窮乏と餘裕又必要と無用などが、一切その社會の成員一般に個別的直觀的に知られ、しかも相互が親愛の情によつて結ばれてゐるが故に、有無相通じ、各自の所有物を以て相互に促進扶助を與へ合ふを常とするによるのである。

右の如き未開社會の所有關係の例を若干擧げるならば、アラスカ・インディアンは相互扶助と財產の平等との觀念が強く、其處には文明人の夢想だにつかぬ美しい社會主義が行はれた。或部族では、働くことの出來ぬ冬季には困窮者は裕福者の家に行つて平氣で居候をし、その家を食ひ潰して了へば、その家の人々と共に更に他の裕福者の家に赴

くといふ有様である。その裕福者も悦んで共に無一物になるまで助け合ふ習慣があつたが、斯うした觀念も、その社會が白人化し個人化して行くにつれて、漸次薄れて了つた。又アラスカ・インディアンの食料は殆ど魚撈をして得た魚類の乾物を貯藏した物であるが、年によつて或家は大漁或家は不漁で、冬中の食物に困る家もある。斯かる家や又老人や病人等で働くことの出來なくなつた者も、困窮に陷るに先だつて、豫め救濟を圖り得る特殊な社會制度がある。之をパトラツチと彼等は呼ぶ。或者が一年中食して餘る程の魚類を獲たとすると、部落の人々を集めて今日はパトラツチをするかどうかと相談する。人々は愼重に討議して彼の人格や信用や力量等を語り合つた上で、不可なしと定まると、始めてパトラツチが許される。許された者は全ての人々に食料品や器具を分與する。分與された人々は、その翌年から數人づゝ順次に分與された物品を數倍にして返却して行く。若し先にパトラツチを行つた者が不時の災害に遭つた場合には、彼の願ふだけの人數から返却を受けることが出來る。卽ちこのパトラツチは、社會成員の個別的領解に立脚する名譽と生活の安定と不時の災害等を巧みに扱つた社會制度である（世界地理風俗大系、第一八卷、一六〇頁）。

又カリブ・エスキモーの社會では、使用せずに放つてある生産手段例へば野獸を獲る罠や魚を獲る爲の梁を誰が用ひても差支へなく、借用して破損してもその代償を出すを要しない。更にアイヌの社會でも、食事の時に外から人の來ることがあれば、その人數の多少を問はず家の者と等しく食を勸め、全て微少の食物と雖も自分一人で食ふといふことはなく、その座に在る程の人には盡く分配して喰ふ（開拓使篇、蝦夷風俗彙、前篇、一九頁）。彼等は又平生一杯の酒と雖も一人飲むことはなく、必ず友を引來つて分ち飲むとも云はれる（羽原又吉、アイヌ社會經濟史、一七九頁）。

オーストラリヤ原住民に就いて見るに、カンガルー等の大きな獲物は、それの捕獲に協力した人々・妻の父母・父の兄弟・兄弟等の近緣者又幕舍に居合せた人々の全部に饗應されるが、併し斯かる特別の大きな獲物の例外的な馳走以

外の日常的な食物に於ては、各〻の家族は封鎖的經濟を營んでゐる。然も狩の獲物は食生活全體に於ては、副次的地位を占めるに過ぎず、彼等にとつて絶對的に必要であり家族の食生活にとつて極めて重要な地位を占める植物性の主食物は、女子の蒐集するところであり、之は各個の家族別に消費されるのである。然も共產的な獲物の分配と雖も、之に與る各個人の分配主への親緣關係によつて夫々異なり、單に同一の氏族乃至局地集團の成員であると云ふ事に基づいて、何等の差別もなく分配されるのではない。卽ち各戸の家族が分配の根底にあつて之を規定してゐるのである(Malinowski: The Family among Australian Aborigines. 二七六—八、二八三—七頁)。オーストラリヤの一原住民が贈物を享け、又は儲けの高い俸給を受けると、その後極めて間もなく、彼がそのものを僅かしか又は全く持つてゐないのが見出される——それが食物・衣服・煙草又は他の品物から成つてゐようとも。土人に何故それ等の物を遣つて了つたのかと尋ねると、彼は單に「私はさうしなければならないのだ」と答へる。此の「ねばならぬ」は他の土人の壓迫を表現するのではなくて、親族組織の中に表明された社會的責務の壓迫を表明するのである。如何なる時にも贈物をする責務(obligation of making gifts)はある。之はあらゆる土人の生活を貫いてゐる相互性の原理(principle of reciprocity)から生ずる義務である。當該個人は過去に於て今彼が自分の給料・狩又は彼の勤勞の成果を分けてやる人々から贈物を受けたことがある。又彼は將來贈物を受ける人となるであらう。のみならず彼は婚姻・婚約・入信から生ずる義務を負ふてゐるかも知れない。此等の事情よりして彼は諸〻の人々に贈物をなすのである(Elkin 前揭書、一〇三—四頁)。

頗る未開な種族例へば、アフリカの矮人・セイロンのヴェダ族・アンダマン島人等の如きにあつては、經濟生活は特殊な共產主義に近似する。通常集團が所有する土地の他確かに個人の財產は多少ある。けれども此等の部族は全て私有財產の使用處分を規制する習慣を有つてゐるので、實際上は一種の共同所有權(communal ownership)が全般に存在する。アンダマン島人は、アフリカの矮人も同樣であるが、絶えず贈物を交換する慣習がある。その結果とし

て集團所有の一切のものは不斷に流通し所有主を變へる。ヴェダ族では全ての者に共有ではない財物も集團の同意なしには所有主が他に渡すことは出來ない（Werner: Comp. Psych. 四三八—九頁）。

右の如く未開社會の所有關係は、共產制に近い特質を種々呈示するが、未開社會に於ける私有權の廣範にして明確なる發達を强調し、從來の未開社會に於ては共產制が支配するとする考へに反對する說が、この頃有力になりつゝある。斯かる反對說の主なる主張者に、マリノウスキー及び彼の學派に屬する人々がある。マリノウスキーは彼が詳細に調査したトロブリアンド島に就いて、共產制の存在を否定し、其處には個人間の義務と特權とが平行し、給付は反對給付を受ける爲に行はれる事を指示する。又モースの如きも太平洋民族の原始的經濟關係に於て給付と反對給付との存在を明示してゐる。併し乍ら原始共產制を否定せんとするマリノウスキーも次の如く述べてゐる。卽ち、土人にあつては、所有する事は賦與する事である——此の點で土人は我等とは著しく異なる。或物を所有する者は、それを分配し、それを分與し、それの受託者と頒布者たるべく期待される。富の主要な徵標は物惜しみせぬといふ事である。けち臭い事は最も蔑視される惡德であり、それは土人が强い道德感を抱く唯一の事柄である。他方物惜しみせぬ事は善の精髓である。皮相に觀察され誤つて解釋された右の道德的命令と、それに附隨して生ずる物惜しみせぬ習慣は、未開人の原始共產制といふ一般に廣まつた誤つた觀念に對して責任を負はねばならない（Malinowski, B.: Argonauts of the Western Pacific. 一九二二年、九七頁）。此の言葉によつても明かなる如く、未開社會にも意識的に對立し合ふ個人や個別家族があり、此等を主體とする個別的所有權もあるが、諸〻の形に於ける贈與や貸與が頗る多いので、共產制が存在するに近い經濟生活が營まれてゐるのである。此の共產制に近い經濟生活も亦未開社會が高度の封鎖性狹小性を有つが故に、成員の生活が相互に緊密複雜に聯關結合し、自他は別でありながら又一であると感ぜられ、個と個・個と全との間に調和合致が常に實在してゐる事情に基づくものである。（了）

dialectical, logic would be nothing but the violation of the principle of his logic; for, while in his logic the law of contradiction excluded contradictions, postulating their non-entity, the dialectical logic does include contradictions. Its formula reads: 'A=non-A'. Such a formula, unallowable in the traditional logic, constitutes here its very essence. Hegel's logic is thus a construction exactly reverse to that of Zeno.

In the fourth place we reach the logic of analogy, notable in significance in spite of its serious neglect on the part of the human intellect. Having originated in the philosophies of Plato and Aristotle, it was explicitly carried out by Thomas Aquinas. This logic consists in the reversal of what was required in the formal logic by the law of excluding the middle, which law, allowing nothing midway between two truths, postulated that one proposition must be either true or false and that there could be none which would be neither true nor false. It is when the so-called probable or possible assertion comes into question, that the analogical logic has its rôle to play. This may be formulated: 'A : C=C : B'. Here A and B are not connected directly; a middle term is introduced, which connects these two terms. I have not, however, entered into discussions in full concerning the nature and significance of this particular logic; the theme has been of late carefully dealt with by J. Anderson in his work "Bond of Being". The aim of this paper was rather to exhibit the said four logics in comparison, examining each in its specific character as a logic; only, stress has been laid on how the logic of analogy should be necessitated by the dialectical logic itself; the key to the understanding of this point will be found, as I believe, in what is called the infinite judgement.

# A Sociological Analysis of Primitive Society

*By* Jisho Usui

1. Primitive people form highly closed societies each of which has little contact with the rest of the world.

2. A primitive society is generally very small, existing on a limited area of land sparsely populated.

3. Primitive people living together in a small society tend to become homogeneous as a result of a limited number of people meeting and contacting one another all the time. This homogeneity is further maintained by means of tribal endogamy and by similarity in temper and talent due to common blood.

4. A primitive society is static and unchangeable to a high degree, because its closedness allows nothing new to enter it from outside, and its homogeneity makes it impossible for anything different to arise from within. This static character is reinforced by ancestral worship and cultural integration. The whole life of a primitive man is merged in customs; the future as well as the present is to him but a part of the past.

5. The primitive man's absorption in customs is part and parcel of the *an-sich*-ness of his attitude to life. He has no consciousness of norms, nor is he clear about the distinction or conflict between individual and society. This *an-sich*-ness also manifests itself in the ethnocentricism, belief in magic, and some other features of a primitive society.

6. Members of a primitive society have frequently repeated contact with everything in the society; consequently they know each object in every detail. This accounts for the concreteness, intuitiveness, and individually specific nature of their understanding and treating every object. In this connection may also be mentioned the intense differentiation of language among primitive people, the concreteness of their conceptions of time and space, and their lack of general ideas. They can have an intuitive representation of an object whenever they entertain an idea closely related to it, just as well as when they have a sense perception of the object itself. Therefore, they feel that ideas and concrete objects always come and function together; to them the former are never separated from the latter. Thus they identify a man with his possessions, or a thing with its name.

7. The intuitive representation which a primitive man has of a

thing is accompanied by strong emotions and, consequently, also by bodily movements. The time and space in which he lives and the pictures he paints are all conditioned by such emotions. His belief in demonic entities is also due to the emotional deformation of his ideas. His synaesthesia and the resultant identification of different things are also to be explained by his emotionality. The same emotionality manifests itself in the mutual affection between the members of a primitive community.

8. The mutual affection and the concrete and individually specific way of understanding and treating one another make the social life of primitive people harmonious, promoting mutual piety and mutual help. In a primitive society, therefore, there is perfect adaptation and consensus between individuals as well as between individual and society. Such people have a collectivistic sense of responsibility. They take for granted the unity and identity of individuals with one another, and of an individual with his society.

9. Because of their inclination to identify and unify different things, primitive people are subject to the Law of Participation (*loi de participation*).

10. As a primitive society is homogeneous, there are in it but slight or even no differences in political power or wealth. Such men as chieftains should be regarded as nothing more than care-takers; there are yet no class distinctions. Only as the society grows larger and comes into conflict with other societies, there arise gradually the classes of priests, nobles, slaves, etc. The position of men or women is higher or lower according to the economic contributions brought to the society by either sex. Aged people are influential because they are better acquainted with traditions.

11. There are families even in a primitive society. As a matter of fact, most part of production and consumption are done by families as units. Property right is recognized to an individual as well as to a family, but such practices as giving gifts, lending and borrowing, and mutual aid are so common that economic life in a primitive society is very nearly communistic.